
魔女の帳 - rideau de wicca -

KuMA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女の帳 — rideau de wicca —

【Nコード】

N7230P

【作者名】

KUMA

【あらすじ】

彼が、その街を訪れたことに意味などはなかった。

それでも、ひとつの出会いが世界より重いことはある。

冷徹な美貌と硝子細工の危うさを持つその少女に命を握られながら、

旅人イーヴは、異端の理へと徐々にその足を踏み入れていく。幻想と現実が入れ替わった、醒めるようなその夜を境にして。

——さあ、今こそ魔女と怪異の幕が上がる。

前

・序幕「誰のものでも無き独白」
モノローグ

遠くで、宴の音がする。

リュートとリラの奏でる旋律、爆ぜる炎、人々の楽しげな笑い声。農作より商業の方が生活の中心であるようなこの街においても、収穫祭は街を上げて行われる、大切な季節の区切り目だ。

今年得られた恵みに感謝し、これから訪れる長い冬を無事に乗り越えられることを願い、詩と唄のある人生を喜び、人々は謡う。皆が笑い、誰一人として俯いている者はない。これからの季節がより辛く、より厳しいと分かり切っているからこそ、誰もが心より宴の空気を楽しんでいるのだ。

今ごろ、街を貫く大通りは、出店で埋め尽くされていることだろう。湯気を立てる料理と葡萄酒、中身を刳り貫かれた南瓜カボチャのランプで辺りはまるで昼のような明るさに包まれており、道端のあちこちでは、きつと詩人達が新作の物語を謡っている。

船々が灯した灯籠で川は幻想的な光の帯に彩られ、街のあちこちにあるの教会は、どこも熱心に祈りを捧げる信者達によって埋め尽くされているのだろう。

街の中心部には、広場がある。そこでは、若い男女が輪となって踊っているに違いない。軽快で陽気で、そしてこの上なく幸せなりズムの音楽と共に。

——それら全てが、恐怖を増す。

ここには、何もない。街の中心部からは遠く離れた路地の裏、月の光さえも届かないような、ここは闇の領域だ。

決して表通りからは分からぬよう両手両足を縮こませ、古ぼけて朽ちた酒樽の陰に、一人の少女が蹲っていた。

肩が細かく震えるも、物音を立てぬようにそれを必死で押さえつ

けている様が見て取れる。唇を血の滲むほど強く噛み締め、目までが堅く閉ざされていた。

今の彼女に存在する世界とは、裏路地の濁った匂いと遠く聞こえる祭の音、それだけだ。

だが、その世界の中にはある。宴で賑わう声の中、はつきりと、存在を異にする足音がする。

カッ、カッ。カッ、カッ。カッ、カッ。カッ、カッ。

几帳面にきっちり二歩歩んでは歩みを止め、その度に周辺のを漁っているのが、気配で分かる。

機械的で、効率だけを考えた動き。それは、無意識の本能のみが成している技なのだろう。少なくとも、飲みすぎて一足早く祭から抜けて来た人間の足取りなどでは有り得ない。

また、ある意味で？それ？は人間ですらない。

何度遭遇したところで、彼ら、いや？それら？を目にする度に全身を寒気が覆う。それすらもまた、正確な表現には程遠いことだろう。こうして、近づいてくる足音を耳にただけで、それらが一度吸った空気が肌に纏わりついただけで、しっかりと2本の足では立てなくなる。

姿など見えなくとも、断言できる。そこにいるのは、自分たちとは明らかに一線を隠した別の？何か？。

その予感、しっかりとした理屈や体系に基づいているわけではない。彼女とて、当然万能などでは有り得ない。

頭の中に、理性を無視し直接本能に語りかけて来る誰かがいるのだ。もしくは、理性すらをも無視できる恐怖がある。

どちらにせよ、恐怖は間違いなくここにあった。そして、恐怖とは危機への前触れだ。

足音は、徐々にこの裏路地に面する通りへと近づきつつある。

気付かずに通り過ぎてくれる確率は、果たしてどれ程あるのだろうか？ 見つかって、無事逃げ切れる可能性は？ 自分のかすかな抵抗が、果たしてどれだけの意味を成す？

その全てが、もはや分かりきっていた。だが、結論を導き出す前に、彼女は考えそのものを頭の中から追い払う。

（いけない。考えてはいけない。今は、何も考えちゃいけないんだ——）

呪詛のように繰り返す言葉。それが、唯一この恐怖から逃れる手段。

足音が、裏路地の前で停止した。

それまでと同じように周囲を漁り、そこで唐突に足音の質が変化する。木靴の底が煉瓦を叩く乾いた音から、湿った土を踏む重い音へ。

すなわち、表通りの足音から、裏路地を歩む足音へと。

足音は、まっすぐこちらへと向かってくる。雑多に物が積まれたこの裏路地には、他にも人が隠れられそうな場所など、それこそいくらかでもあるというのに。

何故？ 自分と同じように、あちらも私のいる位置が分かるのか。こちらは、こうして一箇所で息を潜め、一切の気配を殺しているはずだというのに。

そうして気付く。

雲の位置が変わったのか、なかったはずの月明かりが路地の中を斜め上から照らしていた。長く伸びた彼女の影が、古樽の横にはつきりとした人影を浮かべている。

——逃げられない。

古樽の端を、手が掴んだ。

今、自分がしなければならぬこと。それだけは、考えないわけにはいかなかった。

このまま、この場所ですら震えていてはもうしょうがない。やるべきことは、他にある。

そして、そのためには——待ってはいけないと、教えられた。服の上から爪を立て、身体の震えを無理矢理止める。

「——ッ！」

声にならない叫びと共に、彼女は、それまで隠れていた樽を肩で思い切り突き飛ばした。

派手な音と共に、樽が倒れる。

金具の部分が錆び付いていたのか、それはあっさりとバラバラに倒壊した。口の中に溜まった唾を吐き捨て、できる限り気丈に見えることを祈りながら立ち上がる。

今や、ただの木切れと化した古樽の横、建物の影に？それ？はいた。

顔も服装も覗えないが、そんなことは関係ない。それが誰であり、どんな者であるかもどうでもいい。重要なこと、それが『何』であり、そして、その目的が『私』であることだけは、分かりすぎるほどに分かり切っているのだから。

不思議にも、あれほど波打っていた心臓が今はひっそりと落ち着いていた。

闇に隠れた頭部のうち、目のある辺りに見当をつけて睨みつける。相手がどう動いても、確実に視線だけで殺せるように。

？それ？が動く。後ろへ。

「――え？」

驚きに目を見開く彼女の前で人影はあっさりと身を翻すと、入ってきたときと同じように、裏路地から表の通りへと出て行った。

まるで、彼女の姿など最初から目に入っていなかったかのように。カッ、カッ。カッ、カッ。

足音が、遠ざかっていく。

「逃げ――た？」

人ですらない彼らが逃げる。それは、いったい何の冗談なのだろう。

彼らは、恐怖を感じない。感情という、概念そのものがないのだから当然だ。死と生の価値が等価である相手に対し、感情などという意味を押し付けることに、果たしてどれほどの意味があるのだろうか。

逃げたのではない——ならば？

閃きのように、脳裏にひとつの仮定が浮かんた。

可能性は極めて低いが、それでも全てを合理的に説明できる、おそらくはただひとつの結論。

逃げたのではない。ならば、あれは追っていったのだ。

——間違いに、気付いて。

そう思い至った彼女は、とりあえず深い安堵の溜息を吐くと共に、月の煌々と照る夜空を見上げた。

その事実、福音だろうか。

それとも、第一の天使のラッパなのか。

ただひとつ言えることは、今、ひとつの歯車が確実に動き出したことだった。

月に語りかけるかのように、彼女は呟く。

「この街に——魔女がいる」

遠く聞こえる宴の音は、まだこれからが酣たけなわだった。

・第一典「宴と魔女の物語」

禍なるかな、不運なるかな、哀れなるかな、愚かなるかな。

黒衣の者よ、汝の魂は救い難き。

光なくして生きれるものか。

父なる神の祝福なくして、どうして地上にいられよう。

墮落の限りを尽くした挙句、彼らは祈りを失った。

淫らな悪魔に魂を売り、更なる墮落を得るために。

子供をさらい、毒を盛る。風を呼びては麦穂を散らす。

さあ、隣人を魔女から守るのだ！

水に浮かべよ、印を暴け。

汝の魂を救うため、我は炎を捧げよう——

リユートの響きが、この詩の終わりを告げる。^{うた}

それと同時に、周囲からは割れんばかりの拍手と歓声が贈られた。

人の輪の中心、草ぶれたコタルディ（前開きの衣服）に身を包んだ吟遊詩人が、悠々とした動作で一礼する。

それは、魔女の詩だった。

悪魔の手先とされる魔女を蔑むと同時に、主とキリストを称えるための賛美歌だ。

黒死病の脅威もさめやらぬ世状のせいか、近年はほとんど毎年のように魔女に関する詩ばかりが作られる。それだけ、誰しもが不安になっているということだろう。

もつとも、男にはあまり関係なかった。素晴らしい詩ならば、それだけで賞賛に値する。

年若く、また多少痩せてはいるものの、^{トルバドゥール}詩人の旅慣れた服装は詩人としての長い経験を示唆していた。事実、詩も演奏も、久々に耳するような惚れ惚れとするものだったと思う。

次第に、歓声の中に金属音が混ざり始めた。その中身は主に銅貨だが、よくよく見れば銀貨もちらほらと混じっている。街人たちができる最大の賛辞に、詩人は即興のメロディーを奏でることのできた。

いい演奏だった。確かに、これならば銀貨の一枚くらい払ったところで、別に損とは思わないだろう。

だが、不幸にして彼は銀貨など一枚も持ってなかった。それどころか、財布の中身は埃を除いて、何もない。

先程、屋台で食った羊肉が最後の路銀のなれの果てだ。その現実を再び確認すると、彼は深々と溜息を吐いた。

：ない袖は、振りようがないよな。

ひっそりと人の輪の中から離れようとした彼だったが、その裾を掴む手があった。

「ダメだよ、おにいちゃん。ちゃんと、詩人様にお礼しないと」
少女だった。もう片方の手を母親と思しき女性に繋がれながら、彼の顔のすぐ下で眉を顰めている。

近くにいる人々の視線が、既に歌い終えた詩人から彼の方へと移動した。ちらほらと、少女に賛同する声が上がりはじめ。母親も少女を止めることはせず、顔を背けながら笑いを噛み殺していた。

もともとが、祭の席だ。それが些細なアクシデント程度であれば、煽り立てて酒の肴にでもしたいと言ったところが本音だろう。

「おとうさんがね、言ってたの。詩人様からすてきなお歌を聞かせてもらったなら、こっちも何かお礼をして？ありがとう？ってしなくちゃいけないって」

少女は叱るようにそう言って、最後に「めっ」と付け加えた。そのときには、彼と少女を取り巻く波は、集まっていた人ばかり全体にまで伝わっていた。

「そうだ、そうだ！」

「兄ちゃん、逃げるなー！」

…どうにも、このまま黙って抜き出すというわけには行かなくなつたようである。

顔に苦笑を浮かべながら、彼は頭の裏を掻いた。困ったとき、無意識のうちにしてしまう彼の悪い癖である。

「…まったく、何もかも嬢ちゃんの言う通りだな」

男は、少女の頭にぽんと軽く手を置くと、先程とは反対の方向に向かつて歩き始めた。人だかりが左右に割れ、男の前に即席の道ができあがる。人だかりをぬけると、男は吟遊詩人の隣に立った。

若い男だ。そして、それ以上に大きい。六フィート（約190cm）近くはあるだろうか。

体の細い詩人の隣に立つと、それはまるで大人と子供のようなだった。顔の印象は、一言で言えば随分と厚ぼったい。皮が太く、そのために彼の年齢を実際以上のものに見せているのだ。グロッケ（外套）の裾から僅かに覗く手と足も、明らかに鍛え上げられたしなや

かな筋肉でもって鎧われている。

深呼吸をひとつすると、男はくると人だかりに向き直った。

その体軀に押されてか、一瞬しんと静まり返る。

「――さて、と。ただ見をする気はなかったんだが：自慢じゃないが、俺はこの街にはついさっき着いたばかりで、一銭の持ち合わせもない。それに銅貨や銀貨、ましてや金貨なんかじゃ、今の詩にはちと無粋ってなもんだ」

観衆たちが、そうだ、そうだ、と賛同の声を返してくる。

男は、満足そうににやりとした笑みを浮かべた。

「：てなわけで、俺からもちよいと面白い出し物をしたいと思うんだが：誰か、遊び札カルテ持っていないか？　なんなら、コインでもいいけどよ」

彼が観衆に向かって問い掛けると、隣の詩人が口を挟んだ。

「占タロい札なら私が持っているが、それでも構わんかね」

「ああ、上等だ」

詩人は、荷物の中から古ぼけたカードの束を取り出すと、男へと手渡した。

試しに、上からの数枚のカードをめくってみる。占いなどにはとんと程遠い男だったが、それが長く使い古されたものだという事だけはよく分かった。

それを気配で察したのか、詩人は恥ずかしげに苦笑した。

「：なに、一人旅などを続けていると、どうしても未来が気になってしまうものでな。：もつとも、お前さんは違うようだが」

「未来なんて知らない方がいい時もあるさ。俺は、先なんてなるようになるとしか思わないタチでね。：それじゃ、何枚か借りるぜ」

男は手馴れた手つきで束を切ると、束の中央あたりから適当に三枚のを抜き取って、残りを詩人に返した。そのカードを、男は裏返したまま目の前の地面に並べる。

「もう気付いた奴もいるかもしれないが、俺は今からこのカードの表に描かれている絵柄を当てる」

観客はどよめかなかった。あちこちで、寒々とした溜息を吐くような者さえいた。

思いがけない反応に、男が怪訝な顔をする。すると、笑いながら詩人が言った。

「はは、そんな手品は、皆もう見慣れておるよ。もしかしてお前さん、このアルルのような都市へと足を運ぶのは、これが初めてではないのかね？」

「…今までの田舎村では、こいつで十分に盛り上がったんだけどな」

男は、心底困った表情になって後頭部を掻く。

「なあ詩人さんよ、なんかいい演出はないもんか？」

芸と言っても、他にいいものがない。思いつかない。

腕を組んで彼が考え込んでいると、隣から詩人がからかうように声を上げた。

「ならば、このタローの絵柄を、裏にしたままで詳細に述べるといふのはどうだ？ 一口にタローと言っても、随分と違いはあるからの。もっとも、私のタローはちと古いものでな、お主が同じ柄を見たことは、おそらく今までにないと思うが。

：おっと、言うまでもないが、タローをもう一度見直すような真似をしてはならないぞ？」

周囲から押し殺した笑いが漏れる。

皆、分かっているのだ。手品師にとって一番困ることは何かと言えば、これから行う手品の内容を観客から逆に指定されてしまうことである。事前の準備がまるでなく、しかも即興のタネだけで観客を満足させる演出を完璧にこなすなど、おおよそ超一流と呼ばれる手品師として、そう易々とはできないだろう。

いや、さもなくば、それは――

「よし、それでいこう」

だからこそ、男があっけなくその言葉を告げたとき、観客たちが受けた衝撃は大きかった。

だが、やはりどよめきは起きない。誰もが、驚きのあまり息を吞

んでしまったからである。

「：ちえっ、なんだよ。まあいいさ、どっちにしろ俺には芸なんてこれくらいしかできないんだからよ」

周りの静寂を完全に勘違いして、男はカードを凝視する。

『うーん』だの『これは：』だの、やけにわざとらしい独り言を繰り返した後、男はおもむろに隣の詩人に向かって言った。

「なあ、あんた。俺がカードの絵柄を言った後、あんたが拾ってこいつらと俺によく見えるように掲げてくれ。絶対に、あんたが、俺にもよく見えるように、だ」

「ああ、それはかまわんが：」

「あんたらも、それでいいな？」

彼は、観客に向かって言った。既に動揺から一段落していた彼らだったが、文句を言う者は誰もなかった。

「――よし。それじゃ、始めよう」

男は、右端のカードを指した。そして、滑らかに喋り始める。

「まずは、こいつ。真ん中に大きな輪がある。水車小屋の車輪だ。

両側に、車輪から落ちてく男と昇っていく女が見える。あと、四隅に鳥だの牛だのが書かれていて、輪の上にはしよぼくれたじいさんが浮かんでいる。とにかく、なんだ：変な絵だ」

男の言葉に、詩人が軽く血相を変えてカードをめくった。

言われた通り、男にも、観衆にもよく見えるように高く翳す。

果たして、それは正に男が述べた通りの絵であった。

「――」

静まり返っていた人だかりの中で、誰かがパチパチと手を叩いた。その音はだんだんと大きくなり、やがて、詩人が演奏を終えたとき以上の喝采となって、彼一人へと浴びせられる。

「：驚いた。默示録の四獣の描写までこうも正確に当てるとは――お前さん、本当にこのタローを見るのは初めてかね？」

「占いは趣味じゃないんでね。それに、驚くのはまだこれからだぜ」と、中央のカードを指し示す。続けて、左のカードにも。

「次に、こいつ。机に座った陰気な男で、机には剣やら帽子やらが転がっている。最後のカードは、男が一人。足首を縛られて、片足で立ってる。…楽しそうに笑ってやがるな。なんだこりゃ、ふざけてんのか？」

詩人がカードをめくると、そこにはやはり男の言葉と細部まで一致する絵柄が描かれていた。

喝采が、一段と大きくなる。それこそ、前の通りを歩いていた人々は皆、この不可思議な芸の虜となっていた。

（この様子なら、誰からも文句は出そうにないな）

男は、商業都市と名高いアルルでもこの芸が通用することに安堵した。

実は、彼は他に稼ぐための手段を持っていない。これが売れないとなると、この街では生きていけないことになるのである。

「…これは、すごいな。だが、こいつは間違いだよ」

詩人が苦笑し、男はその言葉に眉根を寄せた。

拾い上げたカードのうち詩人は一枚のカードを抜き取って見せ、

「三枚目のカード、こいつは『吊られた男』^{レ・ペンデュ}と言ってな。本来は、こう——」

言いながら、カードを逆さまにひっくり返した。

「——逆さ吊りにされた男のことを言う。決して、ふざけて笑っている阿呆じゃないぞ」

その言葉に、観客の歓声は、一瞬にして笑い声へと取って変わった。

男も、釣られて笑みを浮かべる。

「なんだよ、てっきり俺が間違えたのかと思っちゃったじゃないか。いちやもん付けんよ。表でも裏でも、同じことだよ」

だが、男の言葉に詩人は軽く首を振った。

「いや、タローには札の上下にも意味があつてな。逆位置のレ・ペンデュだと、これは…？進展？といったところかな」

「…ほう。それじゃ、他のカードは何を示すんだ？」

少々気が乗っているのかもしれない。男は、そんなことを言ってきた。

詩人は、手にしている三枚のカードを併せて並べ：それから、唐突に顔を顰める。

観衆も詩人の様子に何か不吉なものを察知したのか、誰からともなく静まり返っていた。

「：なんだよ、悪い占いにでもなったのか？」

「いや、結果自体は悪いとは限らない。だが、これは：」

詩人は、言い淀む。もともとが気の長くない性格の男には、焦らされているようで絶え難い間だ。

観衆が、次第にざわつき始めた。

何故、占いごときでこうも口籠もるのか。彼には、まるで理解できない。

耐え切れずに、男は低い声になって言った。

「いいから言ってくれ。悪いなら悪いで、別にいいからよ」

詩人は、ともすれば消え去りそうな声で「わかった」と言い、三枚のカードを男によく見えるようにした。

「：まず、一枚目のカード。『運命の輪』レ・ロウエ・デ・フォトゥーン。主に、運命に流されることを暗示する。そして、二枚目が――」

詩人は、またしても言葉を区切った。

「：…なんだよ？ 早く、教えてくれ」

「――魔術師^{レ・バテラー}、だ。そのまま魔女、もしくは魔法を意味する」
再び、周囲からどよめきがあがった。

しかし、それは先程までのものとは全く質を異にする。魔女の詩のすぐ後でこの手品、その言葉を連想しないわけがない。男の芸は、手品として括るには、少々卓越しすぎていた。

「総じて、魔女に流されながら進行する運命――と、こうなる」

男が、苦い表情を顔に浮かべる。

魔女。

それは、キリストの恩寵を捨て、悪魔と契約を結ぶことにより人

に有らざる力を与えられた者たちの総称である。

悪魔への忠誠の証として衣服の一部を彼らに与え、逆に臣従の印として体のどこかに悪魔の印が刻まれる。

ちなみに、魔「女」とは言うものの、それが必ずしも女ばかりであるとは限らない。中には、神の作った原初の人間アダムの末裔でありながらも、悪魔の誘惑に身を落すような恥知らずもいるのだ。

魔女たちは黒ミサへと赴き、墓場から死体を掘り返しては悪魔に捧げる。裸になっても恥らわず、主人となる悪魔の尻に接吻し、他人を呪い、疫病や飢饉といった災害をもたらす。

——？人？ という存在を忘れた永遠の墮落者。

それが、彼らなのである。

「…いや、気にしないでくれ。本来、タローは七枚を並べて行うものだし、私も手慰みにやっている程度だから、これが本当に正しい結果とは限らない：しかし」

「俺の芸は、これで終わりだ。見た分は払ったぜ。じゃあな」

詩人のとりなしも無視すると、男は振り向きもせず、その場から真っ直ぐに立ち去っていった。

人ごみの中、初めからずっと彼だけを見つめていた存在に、結局彼は最後まで気付かなかった。

運が悪かった。まったく、そうとしか言いようがない。

「つたく。どうすんだよ、これから…」

男は、街外れの暗い夜道を宛てもなく歩きながら、ずっと一人ごち続けていた。

おそらく、この街で同じ芸は二度としない方がいいだろう。黒死病全盛期の二十年前ならばともかく、今、この程度の占いで魔女裁判に弾劾されることはないと思う。だが、それでも噂が広がれば、芸どころではなくってしまうだろう。

また、別の演出を考えるしかない。やりすぎず、それでいて確実

に人目を引く。矛盾したこの条件を満たすことは、そう簡単に解決しそうにはない。

「すみません、その貴方」

背後からかけられた声に振り向くと、それまで気付かなかったことが不思議なほど近くに、背の高い男が立っていた。

中央に十字が描かれた白衣。その上に、同じく白のフードを頭まですっぽりと羽織っている。

修道士だ。

「——なんだよ、俺は魔女なんかじゃないぜ」

不機嫌に男が言い放つと、修道士はにっこりと微笑んだ。

「分かってます。イエスはかつて、隣人を疑ってはならないとおっしゃられました。貴方の素晴らしい手品が、この街の人たちに悪い印象と共に受け入れられることのないことを祈ります。

私たちは、純粹に貴方を一人の旅人として歓迎したいのです。どうでしょう？ もし貴方さえよろしければ、今宵は我が修道院に招かれては頂けないでしょうか」

それは、正直願ってもない話だった。なにせ、男は今晚の宿すらもないのだから。

だが、少しの間を挟んだ後、男は首を横に振った。

「：悪いが、俺は純粹すぎる善意ってのは疑うタチでね。断らせてもらうよ」

そう言っつて男が踵を返そうとしたとき、視界の下の方で、何か金色のものが煌いた。

注意してよく見れば、修道士は十に満たないくらいの少女を連れている。煌いたように見えたのは、風になびいた少女の金髪であった。

少女は、無表情だった。そして、彼と目があっても一向に口を開こうとする気配がない。

「：気を、悪くなさないで下さい。この娘は、生まれつき口が利けないんです。こんな子は、あなたのような旅人の冒険談が何より

の楽しみなんですよ。さあ、ご挨拶なさい、レミュ」

レミュというのがこの娘の名前なのだろうか。

少女は、修道士の言葉に従って後ろ足を半歩引くと、頭を軽く下げた。やはり、表情は変わらない。

「それと、貴方は純粹な善意は疑うとおっしゃいましたが、残念ながら我々には下心もあります。貴方は、主の教えに従う者ですか？」

男は、その裏に隠された意図に気が付いて苦笑した。

なるほど。旅人が教徒になれば、行く先々で教えを広めることができる。仮に、そうまでは思わなくても、聖書の一句でも暗記してもらえれば、旅先で新しい信徒が期待できるかもしれないといったところだろう。

確かに、彼らにとっては、それも下心の一つであった。

「…わかった。だが、俺は頭が悪いし、冒険談なんて言うほどの旅も経験しじゃない。それでも、そっちがかまわないって言うんなら、お世話になるよ」

「もちろん、かまいませんよ。皆も喜びます。さあ、こちらへ」

だが、差し出されたその手を、彼が握り返すことはなかった。

その瞬間、飛んできた刃が修道士の手をかすめ、煉瓦の歩道に跳ね返ったからである。

二人の男の視線が、闇に隠れた一点の場所に集中した。

決して、ナイフの飛んできた方向が掴めたというわけではない。

だが、彼は疑わなかった。

いる。この、闇に覆われた帳の向こうに。迸るような、何かの意志が。

口には出さないその思いに応えるかのように、闇の中から足音が響き渡った。月明かりの下、ようやくその姿が露わになる。男は、息を呑んでその人影を凝視した。

女がいる。それも、物語に出てくる聖霊のようなとびきりの美女だ。

いや、女というよりは少女。まだ、十代の半ばあたりだろう。

しかし、それでも彼女は美少女などではなく、既に熟成された？美女？だった。

暗色のカトール（筒衣）と同色のケープに身を包んだその姿は、まるで夜闇の一部から切り取られてきたかのようなようだ。その瞳に見つめられているだけで、背筋にともすれば気を失いそうなほどの、冷たい興奮が疾る。

それは、まるで自分が幻想の世界に迷い込んだような錯覚を起こさせた。彼女がいる、ただそれだけで道端の石さえもが光り輝いて感じられる。

言うならば、それは？彼女？という名の、圧倒的なまでの存在感の塊だった。

「――あなた、先程の魔女ね。その子供から、離れなさい」

凜とした声が響き渡り、少女の眼光が一層鋭くなった。

男は、思わずその言葉に従いそうになりかけたが、一片だけ残されていた理性が、行動を思い留まらせた。

幻想のような少女を睨み返しながらも、男は震えない口調で言い返す。

「イヤだね。俺が一番信用しないのは、出会い頭に危害を加えてくるような奴さ。それに比べれば、詐欺師の方が数倍マシだ」

少女の歩みは止まらない。

規則正しい足音を文字通り奏でながら、一步、また一步と近づいてくる。その一步毎に、背骨に直接氷柱を刺し込まれたかのような感覚に襲われる。

「その考えには、わたしも深く賛同するわ。だから――離れなさい。早く」

男は、ちらりと横の修道士の方を見た。彼は、随分と落ち着いて見える。こんな、問答無用で凶器を投げってくるような――それも、ある意味でこの世のものとすら思えない相手と対するにしたら、少し奇妙すぎるほどに。

それとも、これが神に仕える者の覚悟なのか。

修道士は男を押しつけ、少女の前に歩み出ると、緩やかに一礼した。

「貴方と合い間見える時が来るとは、正直思ってませんでした。はじめまして、貴女ママアゼールの噂はかねてより伺っております。私は、聖レリンス修道院の修道士長、兼司祭……」

「——やめなさい。お前らなど、誰でも同じだ。名前で区別する気など、初めからない」

有無を言わせない拒否。あからさまな嫌悪感を、この少女は隠そうとすらしていない。

男が状況に戸惑っている様子に感づいたのか、修道士が小さな声で耳打ちしてきた。

「旅人殿。彼女こそが？本物の？魔女ですよ。教会からの改心の箴言をことごとく無視し、過去数え切れない教師や修道女を傷付け、あるいは死を与えています。我らが主の、引いては世界そのものの敵のうち、最も忌むべき者の一人。」

——？黒の帳とばり？と呼ばれ、また、恐れられている魔女です」

その声が届いたのか、少女は顔を顰めるように眉を上げた。だが、何も言い返してはこない。

代わりに彼女がした行動は、ひどく奇妙な仕草だった。少なくとも、男にとってはそう見えた。

唐突に歩みを止めると、少女——いや、魔女のしなやかな二の腕がゆっくりと持ち上げられる。肘が伸び、指の一本が指し伸ばされ、それは。

——真っ直ぐに、修道士の眉間へと向けられた。

「————…」

彼は、動かなかった。

まるで、遠く離れた場所にあるその指が、眉間のすぐ前に突きつけられた剣の切っ先でもあるかのように、それまで動じた様子など全く見せなかった修道士の額から次々脂汗が滴り落ち、地面の下へと消えていく。

静寂の中、変わっていく月の位置だけが、時の変化を示していた。
「：旅人殿。その子の傍から、決して離れないでいてください。いいですね」

修道士が拳を固めた。動く気だ。

男は、修道士が連れていた少女を守るために、その前に立ち塞がる。

それを横目に見た修道士が、何故だか苦い顔を浮かべた。

『禍わざわいなるかな、禍わざわいなるかな、禍わざわいなるかな。』

キリストにより、かつて地の国へと追放されし公爵よ。創造と破壊の支配者よ。

——汝の敵に属する者が、ここにいる』

予告なく響いた凜とした声は、歌や詩を謡っている様にこそ、余程ふさわしかったことだろう。

だが、それは紛れもない呪いの言葉だった。

少女の寒気を催すほどの美しさ、他の音が一切とない、月の夜。現実と幻想の境が見えなくなっていく、ともすれば、これは夢なのではないかと疑ってしまう。そして、その度に風のそよぎによって目を覚まされ、しっかりと前を見据える。

修道士が、駆け出した。

『おお、我は汝を抱擁せん。』

汝の恨みは我が憎しみ、我の憎しみは汝が怒り。

父なる神が傲慢を弾劾し、盲目の月を輝かせよ。

今こそが、蛇の鎖を放つ時』

頭ひとつは高い修道士がすぐ眼前に迫っても、魔女はかまわず、

呪いの言葉を吐き続けた。

頑健な修道士に対して、少女の姿はいかにも非力に思えた。

その拳が振り上げられても、視線を上げることすらしない。指先だけが、正確に修道士の眉間を追っている。

大柄な拳が振り下ろされ、

『我が絶望を糧として——』

少女の小さな顔が、跳ねた。

『――汝が叫びを、この者に』

その次に起こったこと。

少女は、頬をしたたかに殴り飛ばされた体勢のまま、それまで伸ばしていた腕を曲げると、たった今自分を殴りつけたばかりの修道士の腕を、軽く撫でた。

ぼきゅり。果実を割るような音が響く。

気が付くと、修道士は折れた自分の右腕を抱え込み、地面にのた打ち回っていた。

「……な」

少女が、力を込めたようには見えなかった。

そもそも、おかしい。修道士の右腕は、肘を支点として完全に前後がひっくり返っていた。果たして、どれだけの力が加われればこのようなことが起こりえるのか。何故にて、このような小柄な少女に、そんな真似ができるのか。

ならば、今のが――俗に言う？魔術？というもののなのか。

呆けているうちに、右腕を掴まれる感触があった。

何故、修道士が自分を置いて一人で魔女に立ち向かっていったのか。何故、連れていた子供から離れないようにと指示したのか。そのことを、彼はすっかりと失念していた。

次の瞬間、彼の天と地が入れ替わる。

これは、魔術などではない。単純に腕を引かれ、重心が崩れたところで、軸足を払われた。それだけだ。

だが、それでも横腹を直に地面に叩きつけられる衝撃は、一瞬とは言え呼吸を止める。その瞬間、男の目は飛び出しそうなほどにまで見開かれた。

荒事には慣れているはずの男だったが、彼は抵抗する意志を見せなかった。その視線は、自分を見下ろす眼光を逆に鋭く射抜いている。にも関わらず、男は起き上がろうとすらない。

倒れた男から顔を背けると、魔女は言葉のない少女の方へと歩み

寄った。少女は、呆けた瞳で迫り来る闇を見上げている。

魔女の右手が、少女の顔面を無造作に掴んだ。

親指が、瞼の上から左眼へと押し付けられる。

露わになっている少女の右目が、しきりに瞬きを繰り返した。

「――」

何を思ったか――思っていたのか――魔女はその手を離すと、代わりに少女の胸を乱暴に突き飛ばした。

数歩よろめき、少女はぺたんと尻餅を着く。

「：今の貴方に、その男を教会まで運ぶことは無理でしょう。一人で行って、人手を呼んで来なさい。早くしないと、貴方の大切な親のひとりが死ぬわよ」

その言葉に少女はくると背を向けると、一目散に駆け出した。辺りは、再び静寂によって包まれる。うめき声を上げていた司祭は、気を失ったのか、ぴくりとも動かなくなっていた。

魔女が背後を見やると、先程突き飛ばした男が直立の姿勢で突っ立っている。

「貴方は、魔女ね」

男は答えない。身じろぎすらしない。

「これから、少し付き合ってもらわ。付いて来なさい。お互いのためになることよ」

魔女であり少女でもある彼女は、そうとだけ告げると真っ直ぐに歩を進め出した。警戒する必要すらないと考えているのだろうか、彼の真横をすれ違ったときでも、まるで視線を動かさない。

男が本当に付いて来るかどうかもお構いなしに、魔女は惨劇の場所からまっすぐに遠ざかっていく。それとも、魔女とは後ろにも目が付いているものなのだろうか？

どちらにせよ、関係はなかった。男は、言われた通りに、少女の背後を数フィートほどの距離を空けて歩き始めた。

まるで、それがごく当然の行動であるかのように。

・第二典「隣人と魔術の物語」

前方を歩く魔女の歩みは、そう速いものではなかった。

別段人通りの少ないを選んで歩くわけでもなく、灯火に照らされた表通りの上を、かつかつと足音を立てながら進んでいく。

入り組んだ都市の路地に慣れていない彼には、まるで同じところをぐるぐると回っているようだった。幾度かは、祭で賑わう人ごみの只中を通り抜けた。

その間、少女は一言も言葉を発しない。

彼は、次第に自信が持てなくなってきた。果たして、本当にこの少女がああ修道士の腕を折り、自分を投げたのだろうか。あれは、ただの自分の幻想だったのではないのかと。

少女自身も一度殴り飛ばされているはずなのに、その頬に手を充てることすらしない。だが、時折道行く人がさして珍しいものを見るでもない様子で少女の顔を覗き込むあたり、はつきりと傷跡はできているようだ。

痛みは、感じないのだろうか。そう言えば、魔女は、悪魔の印のある場所にだけは痛覚がないのだと、以前に聞いたことがありはしたが。

彼の方の傷はといえば、これは大したことがなかった。内臓に伝わる衝撃を受けはしたものの、自分の体重で落ちただけだから肋あばらが折れているということもあるまい。もっとも、まだ歩く度に鈍い痛みが振り返すが。

だがそれよりも、ただ歩を進めるだけの退屈に耐えられないのが、彼の性分だった。

「——おい、お前。魔女」

ぶっきらぼうに声をかける。

「……魔女は、貴方も同じでしょう。口には気をつけなさい、人のい

る場所でその言葉を使うことは、身の破滅を招くわよ」

振り向きもせず、少女は応じた。言葉の割には、自分は一向に周りを気にした様子を見せない。

怒り出すことを考えた男の思惑は、見事に外れた。感情すらもないのだろうか。

「エミリールランジュ」

少女は、まるで無感動な口調のまま、その単語を口にした。

「なんだ、それは」

「わたしの名前。？お前？だの、？魔女？だのとは呼ばれたくないわ」

男は、その言葉に眉をしかめた。背を向けたまままで何故分かるのか、前方で魔女——エミリなどと言うありきたりな名前は決して似合わない——が、ふんと鼻を鳴らして笑う。

「名前もないと思ってた？ 生まれたときから、？魔女？とだけ呼ばれていたとでも？」

「：ああ。まるで、人間みたいだな」

「悪魔にも天使にも、名前はあるわ。ベリアル、ラファエル、ルシファー、ベヒモス、イブリース、アズラエル、レヴィアタント、ミカエル、メフィストフェレス……神にだって、名前はある」

男に、背を向けたままの少女の表情を知る術はない。

だが男の脳裏には、口元を歪めて笑う魔女の笑顔がはっきりと浮かんでいた。

その質問は、無意識のうちに口から滑り出た。

「——お前は、本当に魔女なのか？」

足音が止んだ。

急に立ち止まった少女にぶつかりかけた通行人のひとりが、迷惑そうな顔を浮かべながら避けて行く。

永遠に振り向かないと思われたその背中が、拍子抜けする程あっさりとこちらを向いた。

先程の月明かりの下では分からなかったが、振り返った少女の右

頬は、青黒く変色して醜い痣になっていた。それとは対照的な程に、瞳はどこまでも無表情を保っている。

決して、陽の光が届かない深遠。

何故だか、そんな言葉を思い浮かべる。

「愚問ね。既にそこにあるものを否定することは、逃避にしかないわよ。さっき的一幕、まさか目を瞑っていた訳ではないでしょう？」

それだけを言い放ち、再び踵を返して歩き出す。

男も足の動きを再開しつつ、質問を続けた。

「：俺ひとりを連れ去るのに、何故他の人間をあんな目に合わせた？ 司祭の腕は、折る必要まではなかったはずだ。答えろ」

「それも愚問。？ 敵？を排除するにの理由なんかいらないわ。むしろ、あの場で殺しておく方が正解だった」

魔女は、あくまで淡々と答えだけを返してくる。沼に打ち込んだ杭のように、感情の手ごたえらしきものが、まるでない。

「敵であると言う理由だけで、何もしていない人間をあそこまでの目に合わせたっていうのか、お前は……？」

男は、次第に怒りを抑えきれなくなってきた。

司祭が崩れ落ちた一瞬、実際には一秒に満たなかった光景が数十秒に引き伸ばされて蘇る。

おそらく、司祭の右腕が再び物を掴める日は、もう二度と訪れないだろう。おそらく、健一本で繋がっただけの腕は腐り始める。切断することなく済めばいいくらいだ。

「何もしてない……？ そうね、確かにあの時点ではそうだった」

魔女は臆した風もなく、ただ冷徹に言葉を刻む。

「やっぱり貴方、自分がどれほど危険なところだったのか、まるで分かっていないようね」

——危険？

それは、一体いつのことを言うのだろう。この街に着いてからの考えられる危険と言えは言うまでもなくこの魔女と対峙していた時

間であり、それに生死を握られている今は、更に危うい状況だ。

無論、彼女の立場からすれば、その限りではないのかもしれないが。

「わたしや貴方達——すなわち、魔女の敵。凶眼をあんな陳腐な芸に使うくらいだから貴方にその自覚はないでしょうけど、それが何であるかくらいは知ってるはずよ」

気のせいかな、魔女の言葉に一欠けらの熱が籠る。

まるで、自分ではその単語を口にしたくもないとでも言うように、彼女は男に問い掛けた。

「：異端審問官、か？」

とっさに脳裏に浮かんだその単語を、彼はほとんど反射的に答えた。

異端審問官。教皇庁の持つ、武装を伴った唯一の実動機関。言葉の通り、自分たちの教義にとっての敵……すなわち、異教徒や聖書を否定する考えを持つ者達を教皇へと報告し、裁判にかけることを職務とする者達のことである。

魔女は、かすかに頷いたようだった。

「まあ、それと似たようなものね。おそらくは、ドミニコ会あたりの使いでしょう。彼らは一切の魔術を認めない。だから、その魔術を行使する魔女も、彼らに取っては悪でしかないのよ」

その話は、男も聞いたことがあった。たしか、幼い頃に母に連れられていった教会で聞かされた話だったか。

だが、教会自らが積極的に魔女狩りを行っているなどと言う話とは、とんと耳にしたことがなかった。魔女狩りは、魔女の恐怖に駆られた農民たちが集団となって起こす、言うなれば一種の暴動だ。正当な異端審問官とは、あくまで正当な裁判にかけ、聖書との矛盾点を論議する、そのための場を作ることが目的のはずである。

確かに、彼らに目をつけられることは危険だろう。だが、それで焚処にかけられるのは、黒ミサなどを行うことで実際に害を及ぼした者——目の前の魔女がどうだかは知らないが、仮に自分の存在が

彼らにとって悪だとして、即、身の危険に結びつくとは考えにくい。「信じないなら、それでもいい。でも、その意識は危険よ。率直な話、教会は旧大陸の西側ほぼ全てを支配する、ひとつの巨大な国家と言っている。当然ながら、自分にとって都合の悪い闇の面は、ある程度なら隠せるわ」

確かに、そのことは紛れもない真実であった。それは、歴史が証明している。

だが…

「――あの司祭は、審問官なんかじゃない」

男は、はっきりと断言した。その言葉に、今度は明確な嘲笑が帰ってくる。

冷静を装いつつ、男は続けた。

「はつきりと彼は言った。俺を疑っているわけではない、？隣人を疑うことなかれ？――それが、イエスの教えだと。教会の人間なら、この教えは命をかけて遵守しようとするはずだろう」

現に、彼の母がそうだった。

聖書は間違いを許さない。たとえ、それがどんな些細なものであれ、一度信徒となった者はそれに背く事は許されないのだ。

一般信者であった母でさえそうならば、司祭をも務めていると言ったあの男が、その信条を無視できるはずがない。

魔女は、沈黙を保った。自分の過ちに気が付いたのだろうか…一瞬でもそう考えた男は、甘かったのだろうか。

彼女は、突然笑い出したのだった。

それも、心の底から愉快そうに。

「…ふふふ。最近、彼らも面白いことを言うようになったのね。その通りよ。教徒たちは、その隣人を欺くことは決してない」

そこまでを笑いを噛み殺しながら口にする、急激にその声色が低くなった。声から、先程彼女と対面したときのようなぞくりとした感触が蘇る。

それが何か。何が、少女にあれほどの魔性の魅惑を添えてい

たのか。

今、それが、はっきりと理解できた。

「その言葉で、確信したわ」

——殺意。

生物としての存続に関わる危機感は、時として魅了に似る。

「……やはり、彼らはわたしたちにとっての敵のようね。あいつらにとって、魔女と認識された人間は、決して隣人などではない。隣人とやら以外が相手なら、嘘をつくどころか殺人だろうが強姦だろうが、彼らは聖務として行うことでしようよ」

そこまでを皮肉を込めて言った後、魔女は冷たく断言した。

「……覚えておきなさい。教会とは、魔女にとってはただの処刑場ではないということを」

「……」

何も言葉を返すことが出来なかったのは、わずかとは言え心当たりがあったからだろうか。

もし、それが本当であるとすれば、彼は魔女によって命を助けられたことになる。だが、理解はできてもそれで感情が収まるわけではなかった。

何よりもあのとき、この魔女はあんな幼い子供にまで手をかけようとしたではないか。

その言葉を借りるならば、赤子であろうと修道院に寝泊りする人間は、彼女にとっては明確な敵として定義されているのだろう。だが、自分は、あの行為を許せる気などには、到底なれない。

それでいい。そう考えられる限り、俺は、まだ人間だ。

「質問は、それで終わり？」

「——もうひとつ。何故、俺を連れて行く」

一瞬の逡巡の後に、声は応えた。

「……貴方の力に、興味があるのよ」

それ以上説明する気がないのか、魔女はそこから先の言葉を切った。

煮えきれない気持ちのまま打ち切られた会話に、もやもやとした不快感を覚える。

だがそのとき、二度と開くことがないと思われたその口が、もう一度だけ開けられた。

「最後に、こちらからも一つだけ質問があるわ」

「：何だ？」

思わず反射的に応えてしまい、男は舌打ちを一つした。

「貴方の名前。まだ、聞いてない」

暫くの間、考え込む。いったい何を考え込む必要があるのか、それすらも、もう男には分からなくなっていたが。

数十フィート分の距離を歩むだけの時間を挟み、結局、男はその質問に正直に答えた。

「――イーヴ。イーヴⅡカミュだ。だが、お前に名前で呼んでもらおうとは思わないな、黒の帳」

「そう」

二人の会話は、そこで途切れた。

「：ここよ。入って」

魔女エミリが足を止めた場所は、意外にも街の中心部にもほど近い民家街の一角だった。

月だけでは明かりが足りず、建物の概観までは掴めない。彼女は扉にかけられた錠前を手馴れた手つきで外すと、振り向くこともなくその奥へと消えて行った。

一息の嘆息の後、イーヴも仕方なく後続く。今更、後戻りする気にはなれなかった。

魔物の巣窟に入っていくつもりで、一歩づつ足を踏み入れる。

彼が敷居を潜ったその瞬間、闇の奥で白光が煌いた。

思わず、顔を手で覆う。

――シュッ

乾いた音と共にランプに火種が燃え移り、部屋の内部が照らし出された。エミリの手には、まだ木屑が赤々と燃える火口箱が握られている。

内装は、至って普通の民家のそれだった。

もちろん、イーヴとて逆五紡星のタペストリーやヘルメスの像、セフィロトの樹、山羊の角を付け足された人間の頭蓋骨や栄光の手などが、これ見よがしに飾ってあるような部屋を想像していたわけではない。もっとも、その方が驚きは少なかったかもしれないが。

入った部屋は炊事場を兼ねるらしく、水桶や調理具が壁に並んでいた。調理具の中には鉄鍋もある。もしやと思って部屋の逆端を見渡すと、そこには火の落ちた竈があった。

それをイーヴは、意外に思った。

魔女は、清浄の象徴たる炎を嫌うとされている——だが、人の住む家で竈の存在しない家はない。

果たしてこの場合、どちらがより自然であったのか。

「座って」

エミリが部屋の中央に置かれたテーブルを視線で示した。その上にランプを置くと、自分も椅子の一脚の上へと腰を下ろす。

イーヴはわざと乱暴に椅子を引き寄せると、決して軽くはない体重を華奢な木の枠に放り投げた。

「…さて。何から説明しましょうかね」

エミリは独り言のように呟くと、大きな溜息を吐き出した。

「そうね。まずは、確認から行きましょうか。貴方は魔女で、しかも凶眼を具体的に行使できるにも関わらず、未だ制御する術を学んでいない。にも関わらず、これまで教会の脅威を受けずに生きてこれた。…ここままで、何か違うところはある？」

本当にただ確認だけをするかのように、魔女は言う。

自分は、まだ何も話してないと言うのに。

「——なぜ、そう思う？」

今さら挑発する気もないのだが、イーヴはそうのように言い返した。

単純に、このまま少女のペースで運ばれるのが、気に食わなかっただけかもしれない。

対するエミリの返答は、やはり憎らしいほどに冷静かつ論理的だった。

「先程の吟遊詩人との一幕、見ていたわ。慣れている人間が見れば、そこにトリックがあるかないかくらいは気配で分かる。貴方、どれだけ旅をしてきたかは知らないけど、今まで審問官に捕まらなかったのは奇跡と言っていいでしょうね」

「……」

「制御を学んでないと言ったのは、そんな危険な行為を行うこと自体から判断できる。その方向が伸ばす方にせよ抑える方にせよ、学んだ師がうかつな凶眼の行使を許すわけがないもの。通常、凶眼を持つ子供は魔物の子として噂になる前に親や親戚によって、教会か魔女かのどちらかに引き渡されるわ。：そこからは、まさに運次第」
彼女はまるで興味なさ気にそこまで告げると、組んだ手の上に顎を乗せた。

「そのまま嗜好変質者に売り飛ばされることもあれば、食事も与えられずに部屋に閉じ込められ続けることもあるわ。いかがわしい自称魔術師の下で、魔術を学ぶ名目で一生こき使われる例も多い。その中で、何十人かにひとりの本当に幸福な人間が、自分の力を有効に利用するか、あるいは、うまく隠蔽するための術を身に付けるのよ」

ならば、目の前の少女はその幸福な例になるのだろうか。

思わず口を開きかけたイーヴだが、さすがにそれを口にするこまでは憚られた。

なんにせよ、気付いた風もなく魔女は続ける。

「子供は、自分が特別な力を持っていると知ったら行使することに躊躇いを見せないわ。だから貴方の場合、ある程度成長してから、おそらくは見えないものが突然？視える？ようになったのだと思うのだけれど…違う？」

「全問正解」

溜息混じりに、イーヴは答えた。

「俺は、北の方の名もない村の出身でね。教会はあっても、神父は村の普通の農民が代人しているような片田舎だった。これまでは似たような村ばかりを回って、あの芸で何とか食い繋いでたってわけさ」

憤然とした口調で、彼は言った。なんとなく、先程から自分の心の内を見透かされているようで気分が悪い。

「：なら、魔術について、貴方はどの程度の知識があるの？」

問われて、彼は自分の中にあるその手の知識を思い返す。

魔術。魔女が起こす、超自然現象。悪魔との契約によって行われ、厄災を起こすただけに存在する、忌むべきもの。主の摂理を掻き乱す悪意。時にそれは飢饉を起こし、隣人を殺し、雹を降らせ、娘を墮落させて恥じることを忘れさせる――。

思いつくものを片端から挙げていく。エミリはその一つ一つに頷きながら聞いていたが、その全てを聞き終えると、心底呆れたように言い放った。

「分かってはいたことだけど：一般伝承の魔術知識と言うのは、まったくもっていい加減なものよね。本当に」

彼女は大げさに肩を竦めると、音もなく椅子から立ち上がり、背を向ける。

それはやはり、彼にとっては面白くない態度だった。

「違わないのかよ。さっきのあれだって、似たようなもんだろ。俺の話と、いったいどの辺りが違うんだ？」

こつこつと木製の机を爪の先で叩きながら、イーヴは不機嫌さも隠さずに魔女の背中へと問いかけた。

彼からしてみれば、目の前にいる本職の魔女が何故呆れているのかすらも理解できない。彼にとっては、魔女も魔術も『不条理でかつ分けのわからない何か』――正直、それ以上のものとしての認識はない。

魔女は、一度大きく頭を振ってから向き直った。

「――根本的に、捉えている対象からして異なるわ。これは、わたしたちに取っては常識以前のことだけれど……魔術とは、きちんとした体系に基づいた学問よ」

魔術と学問。不意に言われて、これほど結びつかない組み合わせも珍しいだろう。

国王が現在躍起になって推進している学問は、神学を頂点として補助学問に哲学や論理学、自然学などを取り入れたものであり、主として聖職者の養成のために存在する代物だ。

一方の魔術は、言うまでもなくこれらとは完全に性質を逆にする。むしろ、神学の中には魔術否定のための理論すらも組み込まれているはずだった。決して、同時に肩を並べて挙げられる存在ではないはずである。

無意識のうちに、猜疑心が顔に浮かんでいたらしい。エミリが、かすかに機嫌を悪くした声で付け加えた。

「魔術は、単に便利で邪悪な力と言うわけではない。そもそも、力そのものに善悪なんて存在しないわ。よく切れる刃は生活を豊かにするけれど、同時に人を殺すこともできる、それと同じ。

……魔術を学問と言ったのは、きちんとした理屈に基づいた試行錯誤と実践の上に成り立っていると言う意味よ。思いつくものをざっと挙げて、ゲマトリアカバラの数秘法に神話文字、アストロジーシャーマニズム、アナトミードルイド、占星術、錬金術。遙か東方には、生きたまま神か悪魔になるための術もあると聞くわ。これらは全て、別々の理論と体系に基づいたものよ」

無然としながら、それでもイーヴは一応頷いた。

正直な話、彼女の話は難しすぎて、その半分も理解できない。だが、それでも魔術という概念に幾つかの『型』があるらしきことはなんとなく分かる。

それからイーヴの頭に、ごく自然で単純な疑問が浮かび上がった。「……なら、お前の魔術――さっきのあれも、その中のひとつになる

わけか？」

エミリはその質問にはすぐに答えず、側の棚から小さなカップを取り出すと、脇の桶から水を汲んだ。カップは、櫟の木を刳り貫いたどこにでもあるようなものである。

それを、イーヴの目の前に置く。どうも、それが香茶の代わりというわけでもなさそうだが…。

「――わたしの術は、今挙げたものとは少し違うわ。むしろ、何の理屈も考えない素の状態で行う魔術――呪術に近いものかもしれない。これを見て」

彼の目の前で、エミリは水の表面に人差し指を浸した。ゆるやかに、その先を動かし始める。穏やかだった水面が波立ち、次々と波紋が四方に広がっていく。

「あらゆる魔術は、突き詰めるとその原則はひとつだけよ。

すなわち、？意志？を介して物事の因果性質に？干渉？すること。

介在する意志が強いほど影響力は増すけれど、通常は方向付けがされないために力は霧散し、意味を成さない。今挙げた術のほとんどは、数字への意味付けや人形などの偶像を通して、その方向付けを確定するための技術と言えるわ」

話しつつも、その指先の動きは止まらない。まるで変わらない調和の下に波紋は生まれ、そして淵に当たって消えていく。

「わたしは逆に、発する意志を強く具現する方法を追及している。

意志が強まれば、自然とその目的も定まるわ。もとより、何の意味もなしに人は何かを想うことなどできやしない…」

イーヴは、熱にでも浮かされたように彼女の白い指先を見つめていた。

肉などまるで付いていないような指の先に、まるで陶磁器のような薄い爪が付いている。その爪がかすかに動かされる度に新たな波が生まれ、一瞬だけ高く聳え立つと、ひれ伏すようにその指先から離れていく。

幻想の時間は、やはり同じ指先の持ち主によって破られた。

「その手段は、最も内面を顕すもの。視線と言葉。見ることによって対象を定め、言葉によって影響を生む——」

視線という言葉に反応して、イーヴは顔を持ち上げた。

一瞬、息を呑む。

水面を凝視するエミリの瞳は、まるで他の対象を映していなかった。

瞳孔が異様に拡大し、目の色が変わったようにすら見える。もしかしたら彼女は、彼が視線を動かしたことにすら、気付いていないのかもしれない。

「——こんなふうだね。煉獄の魔よ、釜を吹け」

瞬間、風もないのに水面が荒れた。

不自然に波立った水が、カップの淵を飛び越えてテーブルを濡らす。のみならず、イーヴの顔面にまでも数滴の雫が跳んだ。

指で弾いたのでは有り得ない。白い指先は先程までと同じように、水面の上を滑るように撫で回しているだけだ。にも関わらず、水自身が彼女の言葉に従ったかのように、まるで自らの意思で？跳んだ？のだ。

呆氣に取られている彼の前で、エミリが濡れた指と手を布で拭きながら説明した。

「——これは大したことじゃないわ。自分の指先で波を立て、意志によってその幅を増大させるだけ——おそらくは、？視る？だけでこれと同じことができる人もいるでしょうね。十中八九、世界に影響を及ぼすだけの意志力を持つ人間の力は、先ず視線として顕れる。それが凶眼であり、時には邪視と呼ばれるものよ。貴方が使っていたのは、紛れもなくその一種だわ」

凶眼。その言葉を、彼女は先程から何度か口に出している。

ふと思いついて、イーヴは魔女に問い掛けた。

「：そう言えば、魔術と手品の違いは気配で分かると言っていたな。あれは、一体どういう意味だ？」

彼女は口元に手を当てると、考え込むように天井を見上げた。

そうした様は、まるでどこにでもいる普通の少女と変わらない。
一瞬、不覚にも彼はそう思ったイーヴは、それから慌てて頭を振った。

（――駄目だ。見た目で判断することは危険すぎる）

たとえ幼い少女の姿をしてようと、彼女は魔女であり、簡単に人を殺せるだけの力を持っているのだ。そもそも、こうして説明している事にしても、どこまでが真実でどこからが嘘なのだから、彼にはまるで判断が付かないのだから――。

「…理由はと聞かれると、実のところよく分からないのよ」

こちらの思惑には気が付いていないのか、エミリは天井を見上げ
たまま返事を返した。

「敢えて言うなら、手品の場合には必ず種を使う必要があるから、
注意してみればどこかで怪しい仕草があるわ。なんとなくでも、そ
れが違和感とは言えるものが。あのときの手品の場合、貴方はわざ
とらしく時間をかけてはいたものの、答え自体はあっさりと弾き出
していた。そんなところね」

「…なるほどな」

イーヴは、心の中で一度だけ確認するように頷くと、おもむろに
口を開いた。

「確かに、何もかもあんたの言う通りだ。俺は、数年前から物の？
裏？がぼんやりと見えるようになってきた――カードの裏や、壁の
向こうの景色だな。まあ、あのくらいにしか役に立たないような代
物さ」

「いいわ、それでも」

エミリは、まっすぐこちらへと視線を向けてきた。

その目が、今までとは少し違う質の光を放っている。

「――さて、本題ね。わたしは、貴方の凶眼を研究したい。それが
どんなものであれ、成長の過程で無意識のうちに統制・有意化した
自然の魔術制御装置の一種であることに違いはないわ。代償として、
わたしは貴方に魔術を教える。やりようによっては空すら飛べるよ

うになるかもしれないし、逆に誰にも感づかれない程にまで能力を極小化することも可能よ。

：どう？ 決して、悪い条件じゃないと思うけど」

「一応、聞いておこうか。：断ったら、俺はどうなる？」

彼女の瞳に、険悪な光が浮かんた。忘れていたあの悪寒が、先程の数十分の一とは言え蘇る。

「殺すわ——もちろん」

エミリは、淀みなく言い放った。

言葉通り、それがごく当たり前の行為であるかのように。

「貴方には既にわたしの術の秘密を教えてしまっているし、それ以前にこの家の場所も知っている。わたしとて、自分を破滅に追いやるかもしれない危険を野放しにできるほど楽天家じゃない。

：忘れてはいけないわ。一度でも魔女と誰かに疑われた者は、死ぬまで明日の死に怯えて暮らさなければならぬのよ」

それは、脅しだか警告だか、おおよそ分からないような文句だった。どちらにせよ、彼を救う類のものではないだろうが。

「それでも、わたしにとっては最大の譲歩よ。だから、これを断るなら、もう死んでもらうしかない」

そこに、何らかの感傷を感じ取ることができない。

硝子球か、もしくは死者のような無表情の瞳が、そこにある。

「正気か：お前？」

イーヴは、正面から魔女の眼光を睨み返した。

「生憎と、魔女とはこれで正気なものなの。安心なさい、貴方も直にこうなるわ」

二つの視線がランプの上で交差したまま、時が流れる。

結局、彼は縦に頷いた。予想はしていたが、やはり選択肢はないようだ。

「——交渉は、成立ね」

それを交渉と呼べるのかどうかには甚だ疑問の余地が残るが、とりあえず、彼女はそれで満足したようだった。

水の量が半分ほどにまで減ったカップを取り、汲んだ水で軽く流した後、棚に戻す。

これで話は終わったとばかりに、彼女は大きく欠伸をした。

「夜も更けたことだし、わたしはもう休ませてもらうわ。上の部屋が空いているから、あなたはそこを使ってちょうだい。もつとも、長いこと使ってなかったボロ部屋だけど」

彼女は部屋の隅に設えられた梯子を指差すと、自分は出入り口の他に二つある扉のうち、梯子側の扉に手をかけた。

梯子の先の天井は、ぽっかりと開いている。どうやら、彼女の部屋の上に当たるらしいその空間は、もうひとつの小さな部屋として確保されているらしかった。

エミリはボロ部屋と言ったが、階下から見ると限り汚れているようには見えなかった。テーブルの上のランプを掴み、梯子の中ほどの段に足をかけて、部屋の中を覗き込む。空の本棚と奥の方には寝台があり、その上では布団が綺麗に畳まれていた。

やはり、塵一つ落ちていない。

(…もしかして前もって掃除でもしてたのか、あいつ)

その姿を想像し、自分の考えに苦笑する。

掃除をする魔女。それも、自分のためだけに？

そのとき、一度閉まったはずの扉が再び開いた。言うまでもなく、エミリが消えた扉である。

「一応、警告しておくけど」

気のせいかな、魔女は先程よりも更に剣呑な目つきになっていた。

「凶眼で天井を透視しようとしても殺すわよ。分かるから」

「………は？」

「――なんでもない」

ボタンと大きな音をたてて、扉が閉まる。

今あったことを理解できず、イーヴは暫くの間、そのままの格好で梯子にしがみついていた。

・第三典「平穩と使い魔の物語」

悪夢を見るのは、おおよそ珍しいことではない――

彼女は、その夢が嫌いだった。それが悪夢だからではない、そんな夢を見てしまう自分自身に嫌悪して。

今、彼女の目の前には年端も行かない少年がいた。全身の皮膚がずたずたに避け、顔の器官の形が一変し、肉の中で碎けた骨格が遠目から見たシルエットすら一変させているそれを……まだ、人間と呼べるのであれば。

痛い、痛いと言練がましく呟くソレは、むしろ哀れですらあった。

――反吐が出る。

彼女は、嘲る様に一瞥する。

そんなものは、まるきりの嘘だ。現実には、こんな生半可な死に方ができたはずがない。誰もが、自らの身に何が起こったか把握する間すらなく、一瞬にしてこの世から消失してしまったことだろう。それは救いだ。言うまでもなく、自分にとって。殺した相手にとって、死に方などそう大差はない。少なくとも、救いになることだけは有り得ない。

彼女は、もう一度口の中で同じ言葉を吐き捨てた。これが贖罪のつもりかと、自分自身を嘲りながら。

幻影の首に、手を伸ばす。イタイイタイと、貴族の飼う異国の鳥のようにただ同じ言葉だけを呟き続ける人形は、逆らう様子すら見せなかった。

当然だ。この子供は、とうの昔に死んでいる。

冷めた目でそれだけを確認すると、魔女は首にかけた指に力をかけた。

これは、彼女の夢の中。

一度殺した人間をその中で再度殺すことは、果たして罪になるな

のだろうか。

彼女は――

「――……。」

目が覚めた。おそろしく、半端なところで覚めてしまった。

普段なら、こんなことはない。幻像が像を結ぶ前に目が覚めるか、それともこの手で二度、三度と繰り返し息を止め、そうしてようやく朝が来る。

彼女は、いつになく不機嫌な顔で起き上がった。何故だか、今日に限って随分と眠気が残っている。それに、気のせいか頬が痛い。

悪夢は、毎晩見るわけではない。時折、何故だかちょうど自分が忘れかけたところになると、決まって同じように繰り返される。もしかしたらこれは誰かの呪いなのかもしれないわねと、彼女は自分で思いついたその可愛らしい考え方に苦笑した。

頭が、ぼうっとする…。

昨夜、何か特別な事でもあっただろうか？

寒さのため、寝巻きの上にもう一枚上着を羽織ると、彼女は朝食の準備をするために扉を開けた。

やけに、部屋の中が暖い。目をやると、竈かまどに火が入っている。

「…お、起きたか。食材、勝手に使ったぜ」

その傍で、それまで鞆ふいこを吹いていたイーヴが顔を上げた。目の前にある炎のせいで、額が汗だくになっている。

竈の上には、彼からしてみればやや小さめの鍋がひとつ、ぐつぐつと煮汁を立てていた。中身は、そこらへんを適当に漁って見つけた食べられそうなものを水で煮込んだだけのポタージュである。

だが、そのわりには案外食欲をそそる匂いを放っていた。もつとも、それは彼にとっても多少意外なことではあったのだが。

「――」

目の前、本当に手を伸ばせば届くような距離に、昨晩会ったばか

りの魔女がいる。彼女は白い寝巻きの上に、ガウンを一枚羽織っているだけの格好で、目を丸くして自分を上から見下ろしていた。

「おい、どうした？　まだ寝てるんじゃないだろうな、お前」

「……え？　ええ」

その目がようやく焦点を結ぶと、彼女はあいまいに頷いた。

多少頼りない足取りで水桶まで辿り付くと、冷水を両手で顔にぶちまける。

それを、三回繰り返した。

――目が覚めた。

そうだ、昨日は、ようやく例の魔女を捕まえることができたのだ。あれから三晩、危険を冒して教会の使いの後を付け続け、やっと手に入れた大切な研究材料。

確かに、彼の凶眼自体は、さほど実践的ではないかもしれない。だが、それは関係ない。魔術と言うのは、それ自体が非常に抽象的で曖昧なものだ。必要なのは形作っている概念の構造であり、まるで何の役に立たない術から魔法にも等しいような術を導ける可能性は、決して低くはないのである。最低でも、指針として研究するだけの価値は、十二分にあるだろう。

エミリの顔に、自然と笑みが広がった。

「――で。何をやっているの、貴方は？」

そう問い掛けた少女の声は、完全に昨夜の魔女のものへと戻っていた。

「見ればわかるだろ、朝飯だ」

答えながら、イーヴは柄杓ひしゃくでポタージュの味を確かめる。これも、意外に悪くない。

彼が朝食の準備をしようと思ったのは、概ね二つの理由があった。ひとつは、まだエミリを完全に信用する気にはなれないものの、宿無しだったところに部屋を提供してくれた恩があることだけは否めないこと。もうひとつは、単に自分の腹が減っていただけである。

考えてみれば、昨日は、最後の路銀で食べた一杯のポタージュを

除いて、丸一日近く何も食べていない。睡眠だけは十分に取れたので、体を動かすことが苦痛ではなかったのは幸いか。

今思うと、いきなり招待された魔女の家でぐっすり熟睡してしまったのは、少々浅はかだったかもしれない。だが、今こうして五体満足でいられるのだから、とりあえずは良しということにしよう。

彼は、常に前向きに物事を考えることを身上としていた。

「まあ、あんたは席にでも着いて待ってな。もうすぐできる」

「…材料は、普通に食べられるものしか入ってないんでしょね？
形の悪い人参と間違えてマンドラゴラなんて入れられた日には、それこそ目も当てられないわよ」

「マンド…なんだ、そりゃ？」

怪訝な顔で訊くエミリの言葉を、イーヴは間の抜けた顔で繰り返した。

マンドラゴラ。魔女薬の材料の中でも最もよく知られた種類である。根に聖霊、もしくは小悪魔が宿っており、そのために人と同じ姿を取る。また、引き抜く瞬間には凄まじい雄叫びを上げそれを耳にした人間は即死するため、収穫の債には紐で葉と飢えた黒犬の尾を結びつけ、離れた所から肉を見せつけることで引き抜かせる必要があるとされている。

言うまでもなく、それらは全て魔女を恐れるが故に生まれた作り話だ。実際のマンドラゴラは茄子と同じ系譜に属する植物であり、もちろん悲鳴などはあげやしない。二股に分かれた根が男性の下半身を思わせることからそういう話になったらしいが、彼女自身がそう思ったことは、一度もなかった。

確かに、絞り汁には鎮痛・沈静の効力があるので、多くの魔女が扱っていることは事実だが。

「…まあ、いいわ」

どちらの話も説明する気にはなれず、エミリは言われたとおり席についた。

「準備ついでに、もうひとつ頼まれてくれる？ 竈の隣に、豆の入

った袋があるわ。それを、窓から外に投げて欲しいの」

「豆の入った袋って、これか？ ……これを、このまま？」

言われたとおりの場所にあった汚れた麻袋を手にとって、イーヴが首を傾げる。エミリは、無表情に頷いた。

「もう、帰って来てるはずだから」

「――帰って来てる？」

首を傾げながらも、イーヴは袋を手窓際へと寄った。朝の光を室内に入れるため、鎧戸は既に上げてある。

市街地のため、窓からは建物の壁しか見えない。こちらと違って窓がないので、赤い煉瓦が視界一面を埋め尽くしている。人が横になって通れるくらいのスペースはあるだろうが、犬や猫がいるわけでもない。鳩にでも、やるのだろうか。

「…まあ、いっか」

呟くと、イーヴは袋を宙に投げた。

その瞬間、顔のすぐ側を一陣の突風が風ぎ通る。

放ったはずの麦袋は、そのときには既に眼前から消えていた。

クアー。

「…おい、なんだソイツは」

イーヴが振り返ると、テーブルの上に得体の知れない鳥がいた。

巨大な鳩。いや、違う。よく見れば、それはアルビノ（無色素）の鴉だった。

白い鴉はエミリの席のすぐ前で、彼が今放ったばかりの豆をつついていた。嘴で器用に紐口の結び目を解き、のみならずテーブルの上を汚さぬよう、袋の中に頭を突っ込んで一粒ずつ口の中に運んでいる。エミリがその背を撫で付けても、白鴉はまるで気にした様子を見せなかった。

「この子は『虚』^{リエン}。この家の居候としては、貴方の先輩といったところでしょね」

エミリの言葉に頷くように、それは再びクワーと大きな鳴き声を上げた。

明らかに、人の手による教育を受けた鴉だった。のみならず、運動能力もかなり鍛錬されているらしい。眼前を横切られたにも関わらず、イーヴには、その姿がまるで目に映らなかった。おそらくは、近所の人間の目に付かぬよう、ああしてこの家を出入りしているのだろう。

「：虚には、私も世話になっているわ。彼は、魔女同士を繋ぐネットワークの伝令役なの。本当に魔術を行使できる力を持っている魔女は、たいていの場合、お互いの顔や存在を知らないわ。だから、こうして使い魔として教育した動物同士で手紙のやりとりをさせるわけ」

言われた通り、虚という名の鴉は、足に一本の手紙を巻きつけていた。これも、他の魔女の鴉なり鳩なり猫なりがやったことなのだろうか。彼には、どうにもその様が想像できない。

手紙を解き、エミリはそれにざっと目を通すと、すぐに火の滾る竈の中へと投げ捨てた。

「やっぱり、貴方のことはもう随分と知られたみたいよ。少なくとも、この街に済む魔女は皆イーヴⅡカミュを新たな魔女として見なしている。歓迎と反発は、まあ半々といったところね」

どこか楽しそうに告げる魔女の前で、イーヴはぽかんと口をあけることしか出来なかった。

その情報網の早さにも驚かされるが、それよりも彼にとってはそれだけの数の魔女がこの街にいますと事実ことの方に驚愕だ。

アルルの人口が何万人だかは知らないが、彼女の口調から推察する限り、少なくともここに住む魔女の数は一人や二人ではなさそうである。

「この街の魔女の推測はしないで。それが、わたしたちの間にある暗黙の盟約よ。それよりも、貴方には手伝って欲しいことがあるの。食事が終わったら奥の部屋に来て」

そこまでを一息で言うと、エミリは料理を待たずに席を立った。ちようど鍋の中身を皿に移し変えていたイーヴが、慌てた様子で振

り返る。

「——おい、朝飯いらないのかよ？」

「遠慮しとくわ。貴方が、全部食べていいから」

こちらは振り向きもせずに答えると、エミリは、この部屋から唯一伸びる廊下への扉を開けた。ひんやりとした空気に肌をあわ立てるも、気にしたそぶりも見せず部屋から出る。

「：胸の成長止まるぞ、アイツ」

その一言は、薄い扉越しにしっかりと彼女の耳まで届いていた。

ある程度予想はしていたが、柵の上にはうっすらと白い埃が靄のようになって表面を埋め尽くしていた。今は手に取っている瓶が置かれていた場所だけが、綺麗な真円の形でもって、鮮やかな木肌の色を覗かせている。

溜息をひとつこぼすと、エミリは、自然と閉じようとする瞼を擦った。

さっきついでに思い出したが、昨夜はほとんど眠れていない。だが、天井の上が気になって結局朝方まで寝付けなかったなどと、あんなへらへら男には断じて言えるわけがなかった——死んでも言えない。

寝る前にああは言ったものの、実際ところ、仮に彼が凶眼を用いて階下にあるエミリの部屋を「邪視」——この場合は「覗き」だが——したところで、彼女にそれを知る術はほとんどなかった。

凶眼は純粹自然な魔術だが、魔術とは一般に言われているように魔力や聖霊力などと呼ばれる力を用いて行使されるような、一種のエネルギー体系ではない。それは、あくまで手足の動きや頭で行う計算の延長にしか過ぎず、使用する度に痕跡や予兆を残すようなものではないのだ。いや、あるのかもしれないが、それは例えて言うならば、次に発せられる言葉を頬の筋肉の動きから推察するようなものである。

封じる手ならば、いくらであった。例えば、マイン・コルヌータ角手。人差し指と小指を伸ばし中指と薬指を親指で握り締める握り方で、これを相手の目に見えるように突きつける。

これは、魔女たちの連盟の間でもその効果の正当性が認められている方法だった。例によってその原理は不明だが、それはさして問題にはならない。魔術学で問題となるのは行為を行う過程ではなくそれによる結果のみであり、そこに至る為の原理はさほど重要視されていない。そもそも、常識を超えた真理を追究するのが魔女だとも言えるのだ。

他にもある。グノーシスが生み出した七曜のアミュレットなどはその最高峰だが、彼の邪視が単純な透視能力だとすれば、塩や大蒜にんにく床に蒔いた灰に全身鏡など、民間に伝わる凶眼避けの方法でも効果があるはずである。だが、それを完全に防ぐとなると、やはり経験則に基づくそれなりの魔術理論的対策を取られた、護符の力が必要となるだろう。

当たり前だが、そこらの露店で売られているようなお守りと違い、本物の力を持つ護符は高い。とにかく高い。

（はあ……。あいつがいると、全くろくなことになるいわね……）

自然と出る溜息が、内心の全てを物語ったときだった。

「：なんじゃ、こりゃ？」

彼女をそのろくな目に合わせていない当の本人は、部屋に一步入るなり、いきなり間の抜けた声を立てた。

脚立上のエミリが、扉のある方へと振り返る。

開け放たれた窓から差し込む光の帯に沿って舞う埃に包まれたその部屋の一面は、四辺のうち三辺を、古ぼけた棚でもって埋められていた。棚は高く、そのどれもに暗色の液体や枯れた草、木の実などが一杯に詰められた瓶が並んでいる。彼女がいるのは、それらの棚の中でも、イーヴの入ってきた扉側から見て最も遠い位置にある棚の上だった。

そこから少し離れた位置に、もう一つ、通りへと通じる扉があっ

た。面した道の広さから、どうやらこちら側が正面口ということになるらしい。片方だけ開け放たれた扉には木の札がかけられており、こちらを向いている面には「ouvert（開店）」と書かれている。奥の方には帳簿を付ける為の長台と椅子があった。

「：分らない？　ここ、店頭よ。薬屋の」

まさか、本当にその言葉が必要だったとも思えなかったが、エミリは律儀に返答した。

呆氣に取られた顔のまま、彼はそれぞれの棚に並べられた瓶の列を見上げていた。全ての瓶には古臭いラベルが貼ってあり、冷病に効果のあるカモミユの花、咳を止めるコックリコの種など、短くとは言え一人旅を続けてきた彼にとっては馴染みのある名前も、中にいくつか混じっている。

それらの瓶のうちひとつを取り、何故だか彼は残念そうに呟いた。「：なんだよ、普通の薬草ばっかじゃねえか。てつきり、惚れ薬だの呪薬だのがあると期待したのによ」

「ああ、それなら貴方から見て右上の棚に入ってるわ。呪いに使うのは、その隣の棚」

あっさり言われて、イーヴは思わず持っていた瓶を取り落としそうになった。恐る恐る、言われた棚に視線を移動させる。

残念ながら彼にはどの瓶が惚れ薬で呪薬かは分からなかったが、その棚にあるラベルは、確かに彼の知らない名前ばかりだった。

エミリが、呆れたように付け加える。

「：そう言えば貴方、まともな街に来たのは初めてなのよね。心配しないでも、その程度のおまじないなら、どこの薬屋でも扱っているわ」

ちなみに彼女が言ったのは、異性を惹き付けるとされるアッシュトリリーブスと恋敵を妨害するローズゼラニウムのこととで、これらは香りを服に染み込ませたり油を取って肌に塗るなどの方法で、幸運を得ようというものである。もちろん、具体的な効果はない。

実のところ、彼女がその気になれば本物の媚薬や毒薬に近いもの

も作れるのだが、さすがにそれを店に置くわけにはいかなかった。不思議なことだが、このようなまじないのための薬は、一般には魔女薬として認識はされていない。強すぎる効果、不吉すぎる作用をして、初めて人はそれを魔女薬と呼ぶのである。まあ、都合の良いものを忌むべき存在として認識したがない人間の心理と言ったところだろう。

イーヴは手にした瓶を見つめながら、まだ魂の抜けた表情をしていた。軽く、エミリの眉が吊り上がる。

「…なんか、納得いかないって顔してるけど。まだ、何か疑問でも有るわけ？」

「――いや、そうじゃないんだが…」

イーヴは瓶を棚に戻しながら、言葉を濁した。

「なんていうか…魔女も仕事なんてするんだな、と思ってさ」

彼の呟きは、心の底から本当にそう思っているものらしかった。

そうなのだろうか。エミリには、逆にその感覚が分からない。

魔女と呼ばれても自分は一人の人間であり、そのためには当然働く必要がある。

むしろ彼女としては、この仕事こそ最も魔女らしい仕事なのではないかと思っていた。店を開ける前に、自分の正体を宣伝することになるのではと、危惧していたほどである。

魔女薬の処方は、たいがいの魔女が行っている。儀式時における『場』の作成――例えば部屋をアブリコットの匂いで埋めるなど――や過度の精神集中を起こすためには、どうしても自ら処方しなければ手に入らないような薬が必要となるためだ。一般的には、長い間人目につかない羊飼いの先んじて赤子に呪術を施せる産婆などに、魔女が多いとされているらしいが。

もっとも、彼女にとってここで店を出していることには、もう一つ現実的な意味があった。

それも、極めて重要な。

「…？生活？の真似事をする必要があるのよ。…わたしたちは」

眩くように、エミリは言った。

彼に、その言葉の意味はわからなかったようだ。視線で問い返してくる。

本音を言えばそのままうやむやにしたかったところだったが、昨日見た彼の性格からして、何度でも問い返してくるのは明らかだった。数瞬の沈黙の後、気の進まぬまま、結局説明することにする。

「…旧大陸で一番強大なネットワーク、それがカトリック―すなわち、教会よ。一〇〇年前ならまだしも、現在、彼らの目に全く触れずに生きていくことは、ほとんど不可能に近い。どんな小さな村にだって、教会の一つはあるでしょう？　だから、最近の魔女は敢えて大都市に住むことが増えている」

「…どうということだ？」

「魔女や魔術という存在自体が、教会にとっては禁忌だからよ。存在を認められない相手を街中で堂々と追い詰めて、よくあるようなインチキではない―？　本物の？　魔術なんて唱えられたら、どうなれると思う？　ましてや、教会のお膝元であるアヴィニヨンにも近い、このアルルで」

イーヴは、半信半疑といった面持ちで首を傾げていた。

確かに、このあたりの感覚は実際に教会の手の者と対峙してみないと分からないものではあろう。

「そういうものよ。」

…ふふっ。だから、魔女である私を、彼らは人間として殺さなくてはならなくなるのよ。彼らにとっては、これ以上ない屈辱でしょうね」

「……………」

イーヴは無言だった。気のせいか、わずかに目つきが鋭くなっている気がする。

疲れたように息を吐くと、魔女は、手にもっていた雑巾の一つを放り投げた。彼は、顔の前で難なくそれを受け止める。

「…ま、いいわ。それじゃ、貴方はそっちの棚を拭いてちょうだい。」

貴方なら、脚立なしでも一番上の段にまで手が届くでしょう？」

「しょうがねえな。まったく、何で俺がこんなことを——」

ぼやきつつも、言われたとおり棚を吹き始めようとしたところで、その手の動きがぴたりと止まる。

「：おい。まさかとは思うが、さっき言ってた手伝ってほしいことって、これか？　俺の凶眼をいじくりまわすんじゃないのかよ？」

「それをやるのは、日が落ちてからよ。ただでさえ食い扶持がひとり増えるんだから、貴方にはその分だけ働いてもらわないとね」

そっけなく答えると、彼女は再び目の前の棚の掃除を再開した。背後からぶつぶつと罵声が聞こえてくるが、気にした風もなく作業を続ける。

——慌てなくても、お楽しみは逃げやしない。

その口元に浮かぶ笑みの種類に、気が付く者は誰もなかった。

煉瓦の道を掃くことの無意味さによりやく彼が気が付いたのは、もう日も落ちようとしている時刻になってからだった。

散らばる落ち葉を片付けたところで、見ているうちから次の葉が落ちてくるようでは意味が無い。全面が煉瓦で固められているものだから、つまづくような石ができるわけでもない。結局のところ、自分は意味も無い労働に午後の半分を費やしたことになる。

それでも箒を握る手は止めず、恨めしげな視線でイーヴは店内に目をやった。

エミリは、先ほどから主婦らしき高齢の客と談笑を続けている。
(：さすが、魔女)

決して店の中にまでは届かぬよう、イーヴは小声で呟いた。

彼女が楽しげに談笑をする相手は、これでもう何人目になるか分からない。むしろ、症例を聞いて薬を調合している時間よりも、こうして歓談している時間の方が長いくらいではないかとさえ思われ

た。

街中での商売に必要なギルドの協会からの許可証は、いったいどうやって手に入れたのか？ あの見るからに怪しげな薬の瓶が、どうしてこうも飛ぶように売れていくのか？ 何よりも自分には欠片も見せなかったあの愛想は、一体どこから出てくるのだろうか？ …いくら考えても、疑問は尽きない。

「あ、風邪が治ったら今度はお嬢さんも一緒に連れてきてくださいね。それじゃ、お大事にー」

「ありがとう。エミリちゃんの笑顔を見ると、それだけで病氣なんて吹っ飛んじゃう気がするわね」

老婆は、店の前を黙々と掃き続ける大男の姿に目を留めるなり、何やら意味ありげな微笑を向けた。イーヴには、何故だかそれがとつともなく邪悪なものに感じられる。

エミリは、丁寧にも表にまで出てきてその老婆を見送った。

「…なによ、何か文句がありそうね」

老婆の姿が消えてから、小さな魔女はずっと物言いたげな瞳で彼女を見つめ続けていたイーヴへと声をかけた。口調が、それまでとはがらりと変わっている。

「別に、文句ってわけじゃないけどな」

「言いたいことがあるのなら、早めに言った方がいいわよ。私の機嫌がいいうちに」

むしろ、普段よりもさらに陰悪に聞こえるのは気のせいだろうか。イーヴは、さっきからずっと考えていたそのことを口に出すべきかどうか迷った。だが、結局は言ってみることにする。もとより、言いたいことをじっと頭の中に留めておくなど、彼にとってはどうだか無理な相談だ。

「お前さ、こっちの商売だけずっとやってた方がいいんじゃないか？ 何ていうか…あっちの仕事は廃業してさ」

流石に店の前で『魔女』という言葉は使えないため、彼は途中で言葉を濁した。

だがそれは、紛れもない彼の本音だった。仕事をこなす彼女の姿は、たとえそれが営業用の演技だとしても、生き生きとしていて、何よりも自然に見えた。少なくとも、魔女などという殺伐としたもののよりはよほど少女に似合っている、そう思ったのだ。

「それは無理よ」

だが、小さな魔女は即答する。

「わたしが私である限り、それは決してできないわ。貴方だって、自分の存在を無視して生きていくことなんてできないでしょう？」

その言葉は、自分よりも二回りも低い年齢の少女の口から聞くにしては、随分と小難しく哲学的だった。もともと、彼は頭の回転には自信がない。

「…よく、わからないけどよ。案外、どうにかなるんじゃないか？ 店だってそれなりには流行っているみたいだし」

「――貴方にも、じきに分かるわ」

様々な想いをその一言の中に込め、エミリは思った。

お金や生活の問題ではない。一度、魔女として生まれてしまった者は、何があっても魔女としての生き方を進まなければならない。確かに凶眼の力を抑え、魔術能力を消すことは不可能ではない。だが、それをするとは、一生涯自分を否定し続けなければならないということでもある。

私に、逃げることはできない。逃げられない理由もある。逃げることでできる者が、幸せであるとは思うけれども。

「もうすぐ、店を閉めるわ。そろそろ、後片付けをしておいて」

言いたいことは、たくさんあった。

だが結局、エミリはそれだけを告げると踵を返して店の中へと戻って行った。札を「ferment（閉店）」に裏返し、彼を拒絶するように扉を閉める。

（やれやれ…）

内心で息を吐くと、イーヴは気を取り直して集めた枯れ葉を袋に詰めようとした。

その時である。不意に、背後から服の袖を引く感触があった。振り向くが、その先には誰もいない。

彼がそれを錯覚と片付けようとしたところで、視界の端で煌く金髪に気が付いた。

「――!？」

視線を下げる。そこにいたのは、昨夜あの司祭と一緒にいた口の利けない少女だった。

少女は、店の中からは死角になる街路の一点に指を指す。司祭が、その指の先で頭を下げた。

煉瓦の道を、一陣の風が吹き抜ける。

夕焼けはまるで血のように赤く、空には、早くも月の気配が出始めていた。

前（後書き）

テキスト形式のため、文中のフランス語からは全てアクセント記号が抜けております。そのため正しい綴りになっていないことを予めご了承ください。

後

・第四典「教会と魔物の物語」

すっかりと夜の帳に閉ざされた闇の中を、三人で歩く。

彼の半歩前を歩く修道士長は、あのときの修道服ではなく今は豪華な司祭服に身を包んでいた。

ドミノ（頭巾）の代わりに紫のカロット（半球帽）をかぶり、装飾の施されたダルマティカ（裾長の衣）を身に付けているその姿は、修道士としての格好よりも明らかに様になっている。

それは、身に付けている時間の長さからくるものだろう。おそらくは、こちらの方が彼の本当の顔なのだ。

「『黒の帳』の名の由来を、お聞かせしましょうか」

振り向きもせず、彼の一步手前を歩きながら、司祭が言った。

イーヴは、無表情を貫き通す。彼の同意を求めていたわけではないのか、司祭はそのまま言葉を続けた。

「この夜闇と同じです。こうして、ランプの側から覗き見る限りは全くの無害。しかし、少しでも足を踏み出し、その帳の向こう側を見ようとした者は、決して戻ってくる事が叶わない。

…それは、消えた人間を探しに行った者についても同様です」

司祭は、手に持った灯火で通りがかった裏路地を照らし出した。

光は手前の数フィート程度こそ露にするもの、それ以上の奥になると、全く闇の質は揺るがない。まるで、世界そのものが、そこで終わってでもいるかのように。

彼は、ランプを前方に戻すと言葉を続けた。

「わかりますか。これは我々の仲間に向けた、禁忌への警告なのですよ。確かに見た目はあの通りですが、彼女は魔女であり、悪魔です」

「……………」

イーヴは、先程からずっと沈黙を貫いていた。

何も応える気にはなれない。その脇を、彼の存在などまったく気にかけていない様子で、金髪の少女が歩いている。

何故、俺は彼らに付いて来たのだろうか。

それも、一人で。

店の中のエミリに声をかけることはできただろう。聖職者に手荒な真似はしたくないが、追いつくことだって十分にできたはずだ。

それなのに、俺はそのどちらも選ばなかった。

「――迷っていますね。ですが、貴方の行動は正解です。彼女が我々のことをどのように言ったかは知りませんが、それが嘘であることだけは断言できます」

司祭の言葉が、やけに耳の奥に残る。

だが、彼の言葉が真実でないという証拠はどこにもなかった。エミリの話が、全てでたらめだったとは思わない。だが、全てを信用することもまた、できなかった。それは、彼自身がずっと思っていたことでもある。

そうだ。

だから俺は、こいつらに付いて行くことに決めたのだ。

少なくとも、彼らが言っていた話とやらは聞くことができるだろう。ともすれば、それで分かるかもしれない。

彼女は、信用できるのか……それとも、そうでないのか。

仮に自分の身が危なくなる事態になったところで、彼も腕には多少なりとも自信があった。老人のひとりくらい、瞬く間に叩き伏せて、逃げ果せるくらいのおおのことはできる。当たり前だが、昨日の様子を見る限り、司祭に武術の心得があるようには思えなかった。

だが、先程から気になることがひとつあった。

目を閉じて、何も見えない。いつもは、どんな状況でもおぼろげな形くらいは分かるのに。

「……それとも、貴方は神の僕よりも、通りがかりの魔女を信用すると言うのですか？ 安心なさい。貴方に危害が加わるような事態は、

万に一つも有り得ません」

司祭はそこで言葉を区切り、深呼吸をするようにゆっくりとその言葉を吐き出した。

「貴方は、我々の隣人ですよ」

——彼らにとって、魔女は隣人などではないわ——
昨夜言われたその言葉が、頭の中を反響した。

「：どうでもいいから、早いとこしてくれねえかな。単に話だけなら、これだけ離ればもう十分だろう」

「——いえ。たった今、着きました。このような大切な話は、^{すべか}須らく神の御許で行われなければなりません」

司祭は、ランプを頭上に掲げた。古ぼけた大扉。青い屋根。その上で月の光に反射して輝く、ラテン十字。

教会だった。

「さあ、お入りなさい。迷える子羊殿」

司祭が開いた扉の先に広がる聖堂は、無人だった。

一瞬だけ躊躇するが、彼は周囲を警戒しながらも、その中に足を踏み入れる。

背後で、扉の閉まる音がした。あの少女が閉めたのだろう。

「おかけなさい」

不遜な足取りで、彼は赤い絨毯の引かれた通路を歩む。その左右には、信者が着席するための会衆席がずらりと並んでいた。

周囲を弄っていたイーヴの目が、ある列の上で止まる。彼は、その端の席に腰を下ろした。

改めて見回すと、聖堂の中は随分と広かった。

少なくとも、これまでに彼が見てきた教会や修道院のものよりは、確実に規模が上である。数百人が同時に祈れるだけの椅子の数、数階分を貫いた高い天蓋とそこに描かれたキリストの再臨、そして何よりも正面に据えられた十フィート強はあるだろう巨大な十字架。それとも、都市の教会とは、どこもこのようなものなのだろうか。

司祭は説教台には着かず、十字架とその下にある祭壇の前でくる

りと身を翻した。彼は、たった一人の会衆に向けて、大きく両手を広げて見せる。

――何か。

身体の中に残された、一片の金属片のような違和感がある。

「主は、最初に言われました。光あれ、と。主は天使を火からお造りになられました。人間は塵から作られました。それは、何故だか分かりますか」

「…俺は、問答をしに来たわけじゃない。とつとと本題に入ってくれ」

「わかっています。ですから、こうして本題から入っているのですよ」

不機嫌なイーヴの言葉に、にっこりと微笑を浮かべて司祭は答える。

だが、内心でイーヴは少しだが安堵していた。

エミリは、教会の者は魔女を見るなり蹴り殺そうとするようなことを言っていたが、どうやら、その心配までは必要なかったようである。もっとも、これから先のことについては、まだどうなるかわからないことに変わりはないが。

「――続けましょう。主は何も、意地悪をして塵を材料としたわけではありません。塵とは『無』です。何者でもありえないし、逆に何者にもなれるかもしれない。先ほど私の目に入った一粒の塵も元は魔女の指の欠片だったのかもしれないし、聖なる十字架の一部だったのかもしれない。ですが、主のお使いになった塵は、原初の塵です。だから、それは完全な無です。そして、あらゆる可能性を秘めていました」

イーヴは、足を組んでその説教を聞き流す。彼にとっては、どうせ理解できない類の話だ。もちろん、周囲に気を配ることも怠らない。何かあったときのための用心である。

例の少女と言えば、いつの間にかいなくなっているようだった。まあ、確かに子供が聞いて面白い話でもないだろうが…。

「無から人をお造りになったのは、主の御力に頼らず、我らを試すためでした。自由意志を与えても、悪魔からの誘惑に負けずに創造主への信仰を忘れずにいられる存在でいられるのか、それを試されたのです。そして主は、あらゆる奇跡の行使を、人間にはお許しになりませんでした」

司祭は、そこで一旦、言葉を区切る。

「父なる神とは、唯一にして絶対の存在です。

全にして個、個にして全、過去にして現在、現在にして未来。

彼はあらゆるものであり、あらゆるものを作り出し、あらゆるものを存続させ、あらゆるものを破滅へと導きます。それらは全て創造主である主、只一人だけの特権なのです」

奇跡。その言葉に、初めてイーヴは司祭の話に関心を覚えた。

それは、人成らぬ者のみが見える人成らぬ力のこと。

それを彼は、つい先日に見たばかりなのだから。

「人は、奇跡を扱えません。扱えては、いけません。それは、聖人が主の御力を借りて行う場合にのみ、この世界に存在する価値と意味があります。それ以外の者が奇跡を行使するのは、主に対する冒涇です。

彼らは、主の祝福を受けたこの地上にいていい存在ではありません
ん」

その言葉に、イーヴの背筋が粟立った。

何か、おかしい。

——これは、俺を説得するための説教ではなかったのか？

「須らく、これは彼らが主ではなく、悪魔が人間に似せて作った者の末裔である証拠です。

すなわち、それこそが彼らの罪。

その罪は、樂園の知恵の実を食べた我々の祖先の比ではありません。彼らは、存在自体が罪なのです。ですから」

司祭が、はっきりと彼の両目に視線を合わせた。

彼の瞳の柔らかさは、微笑みは微塵にも変化していない。

だが、その微笑みが、今は逆に恐ろしい。

それは、例えるなら、まるで蜻蛉の羽を笑ってむしる子供のよう
に。

「その罪を償う方法があるとしたら——それは、消えること。どんな祈りも、彼らにとっては無価値です」

多数の気配に気が付いて、それまで司祭の話に没頭していたイーヴは、ようやく背後を振り返った。

聖堂の左右に設置された扉から、修道服に身を包んだ幾人もの男女が入ってくる。彼らは無言で、歩く時にも衣擦れの音さえしなかった。

その数、左右の扉からそれぞれ十人前後。しかも、この豪華な聖堂には不似合いな物を、誰もが手に持っていた。鎌や斧などが大半を占めたが、中にはメイスを携えている者もいた。

今更、疑うまでも無い。彼らは、自分を殺す気だ。

「正気…か？」

自分は、魔女などではない。

確かに人に無い能力を持つてはいるが、これを人を害するために使ったことだけは一度も無いと断言できた。人より、多少見えている範囲が広いだけ。それだけだ。

それなのに。

こいつらは、それを死すべき罪だと言うのだろうか。

「……………」

イーヴは立ち上がった。手には、誰かの置き忘らしい十字杖。

席に着く前に、目につけておいたものである。

祭壇の前の司祭は無視し、イーヴは武器を持った連中の方に向き直った。

十字杖を手の中で数度回転させてから、両手を杖の前後に沿わせ、構えを取る。杖の先端に付けられたイエス・キリストの磔人形が、まっすぐ彼らへと突きつけられた。

間に合わせにしては、十字杖の感触は悪くなかった。

人形の分重心は前に傾くが、意識していれば十分に立ち回れる範囲だろう。逆に、重さの偏りを生かして打撃を増すこともできるはずだ。

彼は、護身のための術として、主に棒術を嗜んでいた。持ち運ぶには不便だが、どこであろうと武器を現地で調達できることが棒術の強みである。素手であれば、数人程度の夜盗相手に引けを取ることは無い。

しかし今、イーヴの前に立ちはだかるのは二十人近い人数である。しかも、全員が武器を手に握っていた。

しかも、彼らは自分を殺す気でいる。

こちらは、できれば殺さずに済ませたい。

この差は、重大だった。殺さずに相手を行動不能に陥らせることは、ただ殺すよりも遥かに難しい。

殺すだけなら、頭蓋だろうが胸骨だろうが、砕くつもりで全力の打撃を叩き込めばいい。だが、そうでないなら、砕く一步手前で力を抜く必要がある。

結果的に攻撃の到達速度が鈍ることも有り得るが、何よりも問題となるのは、戦闘中における判断の早さだ。

迷いが出る。この一撃が果たして相手を死に至らしめるかどうかを思考し、そして判断する、その時間が。

思考の量が増えれば増えるだけ、次へと至る行動は遅くなる。ならば、こちらも相手を殺すことを前提にすればいいだけの話なのだが、イーヴはどうしてもそれをする気にはなれなかった。

(∴それでは、本物の魔女だ)

悪魔の使いと教会が蔑む、魔女の像そのものだ。

俺は、そうなる気にはまだなれない。

「行きなさい。汝らの魂に栄光を、魔女の魂には安らぎを」

司祭の言葉と同時に、一斉に信徒たちが踊りかかった。

叫びながら、あるいは無言で。

共通することは、それら全てが自分を殺すための行動であること

だ。

会衆席の左右に設えられた通路からは、それぞれ数人。椅子と机を乗り越えながら進んでくるのが、十人程度。

（――生き抜けるか！？）

椅子に阻まれ、足元の動きがおぼつかない。イーヴは舌打ちし、その場で凌ぐことを決意して両足を踏ん張った。一度でも転倒すれば、即座に群がり殺されることは間違いない。

最前列にいた女が、手にした麴棒で殴りかかってきた。たとえ麴棒でも、その重さは十分な凶器になる。直撃を頭にでも受ければ、目を覚ますことは二度とない。

十字架を横にしてその一撃を受け止め、彼は女の腹を思い切り蹴り飛ばした。

二人目は、左から。鋼鉄製のメイスが真横から襲い掛かるが、それは避けるまでも無く見当違いの場所を風いでいる。

張り詰めていたイーヴの精神が、その瞬間だけ僅かに緩む。

だが、その直後、鋭利な風切り音が彼の耳のすぐ側を過ぎつた。

タン、と背後で乾いた音。見れば、信徒たちの後方で矢を番^{つが}えている者がいる。

（――まずい！）

動きがままならぬ以上、これでは格好の的だ。射手の腕がよければ、今ので首を射抜かれていただろう。

一瞬の逡巡の後、イーヴは壁側でない方の通路に跳んだ。こちらでない、と、角に追い込まれる可能性があると判断してだ。

通路を走りこんできた男の突きは体捌きで避け、体勢が崩れるのもかまわずに、イーヴは脇下で十字架を回転させた。そのまま、勢いの乗った一撃を男の足元へと叩きつける。

足首の碎ける音とともに、男の体が宙に舞った。胸を激しく椅子に打ち付け、倒れた男は動けなくなる。その身体は、結果的に後続の信徒たちを阻む壁となった。

イーヴは走る。

入り口ではなく、逆にそこから遠ざかるように。

その先には、先程から変わらずそこにいる司祭の姿があった。

「動くな！」

イーヴは壁の燭台を掴むと、蠟燭を振り落として尖った先端を司祭の喉下へと突きつけた。

信徒たちの口から、初めて動揺らしき声が漏れる。

「そこを通してもらうぞ：武器を捨てろ。左右にどけ」

動揺の気配は収まらない。

だが、武器を捨てようとする者は、誰一人としていなかった。

その様子を見て取ったイーヴが、燭台を掴む手に一層の力を込めた。司祭の顎を上向かせ、明らかに頸動脈とわかる位置に一番長い針先を押し当てる。

ここを破られると、人間はまるで噴水のように血の雨を降らす。

抜く際に燭台を大きく横に引っ掻けば、それは間違いなく手の施しようも無い致命傷となるだろう。

信徒たちの動揺は増すが、やはり彼の言葉に従おうと言う気配は表れない。

彼らは、武器を握り締めたままこちらを睨み付けるだけ。そのときになって、ようやくイーヴは自らの致命的な失策に気が付いた。

迷っているのではない。

彼らは、ただ躊躇っているだけだ。

「無駄ですよ」

喉を押さえつけられた格好のまま、司祭がぐもった声を出した。声は、冷静そのものだ。喉元の職台は先端が皮膚へと食い込み、既に血を滲ませ始めていると言うのに、風前の灯火となった自身の命への焦燥が、こちらにも微塵と感じられない。

イーヴの頬に、焦りとは異なる種類の汗が流れ落ちた。

「我々は、死を恐れません。死とは、すなわち天に召されることであり、聖なる任務における殉職は、むしろ名誉ですらあります。むしろ、魔女の戯言に耳を傾け、道を開けてしまうことの方が恐ろし

いのですよ。彼らにとっても、私にとっても」

「お前たちは：これを、聖務だとしても言うつもりか：？」

「はい。貴方には理解できないことなのでしょうね。：哀れなことです」

司祭の言葉はそれだけだった。

命乞いは元より、信徒への指示すら出そうとはしない。ただ、彼は目を閉じると胸の前で十字を切った。

状況としては、最悪だった。いや、それよりも更に下だ。

人質とは、相手の正常な判断を無くすために取るものである。命のやり取りを直に行うこうした場面では、交渉としての意味合いよりも、むしろそちらの方が遥かに重大な割合を占める。

混乱を招き、集団の意味を失わせる。その意図を理解していたとしても、相手の次の行動が確実にこちらの損失を生むと言う状況は、それだけでプレッシャーを与えるものだ。突き詰めた話、人質として取る人物自体に大した意味はない。

彼らには、それがない。

イーヴが司祭を刺殺した瞬間、すでに左右へと回りこんでいる信徒たちは、彼が成す術も無いままに、戮り殺すことだろう。

司祭の命と魔女の抹殺、彼らは秤にかけるまでも無く後者をより重大なものとして捉えている。誰一人、その決定に疑いすらもかけることなく。

それはすなわち、交渉としての余地すらも完全に無いと言うことだった。これ以上の迷いを生ませることすら、望めない。

言うなれば、彼らは既に王^{ロイ}を詰めている状態なのだ。その際に女王^{クイーン}を失わずに済ませられる方法があるのかどうか、ただそれだけを迷う問題でしかない。

これでは、まるで立場が逆だ。燭台を突きつけている自分の方が、後ろのない判断を強いられている。

——どうする？ 司祭を放り捨て、いちかばちかで突っ込むか？ それとも、このまま司祭を人質に取り、万に一つでも信徒を止め

られる可能性にかけるか？ 彼らとて、実際に目の前で司祭が致命傷を負う姿を見れば、ともすれば混乱をきたすかもしれない…。

彼は、分かっていたはずだった。だからこそ、この場面を生き延びるため、彼は司祭を捕らえたのだから。

人質の意義は、何よりも迷いを生ませること。

イーヴの迷いが、隙を生んだ。

弓鳴りの音。

彼は、気付かなかった。信徒のうち一人が、聖堂の周りを取り囲むようにして作られた回廊を回り込み、彼の背後から静かに説教台の裏へと潜んでいたことを。

矢は、ごく近くから放たれていた。それこそ、どんな素人でも外しようが無いほどに。

気が付いた時、イーヴにそれを避ける術はなかった。

——否。

彼がそのことに気付いたのは、外れようがいはずのその矢が、僅かに胸の脇をすり抜けた後だったのだから。

タン……ッ

その場にあつた全ての視線が、その一点へと向けられる。

彼に、鳥類の個体差などは分らない。だが、イーヴはそれまでアルビノの鴉などは、ただ一羽しか見たことが無かった。

「……虚^{リエン}！」

聞き流していたはずのその名前が、やけにあっさりと口を吐いて出たことは、彼にとっても意外だったが。

虚は、矢の中央辺りを咥えたままの格好で器用に身体的位置を入れ替えると、その上へと飛び乗った。壁に突き立った矢を止まり木代わりにしながら、おもむろに矢尻の羽を耒り始める。

恐らく、理解できた者はいないだろう。

虚は、宙を飛んでいる矢を嘴^{くちばし}で掴んだのだ。

むろん普通の鴉に可能な芸当ではないが、飛ぶ虫を主食にする鳥類の動体視力は、矢や投剣の飛来を確認した上でそれを回避するだ

けの余裕が十分にある。ならば、訓練次第で矢を受け止めるまでは
いかなくとも、逸らす程度のことは可能だ。

少なくとも、その実例がここにいる。

むしり取れるだけ羽をむしると、満足したように白色の鴉は頭を
上げた。何度も首を捻りながら、赤い瞳がイーヴや信徒たちへと向
けられた。

虚は、大きく嘶いた。いみな

不吉な声が聖堂を満たす。

白鴉は颯爽と飛び立つと、一面に聖画の描かれた高い天井を一周
し、あろうことか入り口脇の聖水盤で水浴びを始めた。

その羽並みが、一瞬、強く波立った。

いつのまにか、聖堂の扉が開いている。

その向こうに夜が——いや、闇が覗いている。そして、闇はその
一部が切り取られて、聖堂の中にまで侵食していた。

闇が、外套を投げ捨てる。

虚は主人の肩に飛び乗ると、再びクァーと鳴き声を上げた。

黒の帳——エミリールランジュがそこにいた。

「無様ね」

開口一番、黒の魔女はそう告げた。さして大きくもないはずのそ
の声は、なぜか一番奥にいるイーヴの耳にまでも明瞭に響き渡る。

教会と魔女。

最も不釣り合いであるのはずのその組み合わせの中において、しか
し神のために設けられた聖画や装飾の数々は、妖艶を通り越し禁忌
的なまでの美しさを以って、彼女を引き立たせていた。

それは、初めて出会った夜に感じた感覚。

いや、今はそれ以上に。

あるいは、それは神秘的と評すべき美しさであったのかもしれな
い。

「——勝手に逃げて。あっけなく騙されて。その上、こうもあっさ
りと追い詰められて」

イーヴは、何も言い返さない。言い返せないのではなく、彼女の言葉に反感を持つと言う、その意識すらもが浮かばない。

そのとき、彼の全思考は、ただ、その魔女を凝視するためだけに存在していた。

「神という名前を借りて、傲慢と暴力を正義として行使する豚どもが——私の邪魔をしていいとも思っているのか」

絶対零度の冷気が、エミリからイーヴたちへと降り注いだ。いや、そう幻視させられた。

教会の傲慢を糾弾するその言葉とは裏腹に、彼女の態度はまるで不遜そのものだ。だが、誰もがそれに異を唱えられないほど——決して、彼女の力に恐怖しているからではなく——見下すようなその姿勢は、エミリという少女に、これ以上ないほどふさわしいものとして受け入れられていた。

「魔女は灰に。人は塵に。天使どもは火に。なら、神の使いを称するお前らは：いったい、何に変化して朽ちるのでしょうか」

使い魔の鴉を従えたまま魔女はゆっくりと一步を踏み出し、心底から嬉しそうにそう言った。

視線は、まっすぐこちらへと向けられたまま微動だにしない。

その視線は、それだけで人の心を——いや、命そのものを吹き消さんばかりの圧力を以って感じられた。

（こいつ——まさか、俺もろともに殺す気か……？）

有り得ない事だ。いや、有り得ないなどと誰が断言できる？

本来ならば尊敬すべき司祭ですら、この通りあっけなく自分に牙を向けてきたのだ。昨日今日会ったばかりの魔女が信頼できる道理など、いったいどこにあるのだろう。

「——肅清なさい！ あれも、魔女です！」

イーヴの顔の下で、司祭が叫んだ。叫んだのだ。

自らの生命の危機にすら、まったく動じなかったこの司祭が。

どちらにせよ、それまで魔女の威厳に圧倒されていた信徒たちの金縛りは、それで解かされた。無防備に歩いてくる彼女に向かって、

飛びかけられる限りの人数が、手持ちの凶器を一斉に振りかざす。

全員が、もはや声とも判別がつかない金切り声を発していた。

狼から逃げる兔のように、もしくは、火に包まれた屋敷から焼け出される鼠のように。何十人も大人たちが武器を振り上げ、たった一人の少女へと襲い掛かる。

分かっているのだ、これは、決して敵わぬ相手であると。

エミリが、にやりとその口の端を持ち上げた。

『災いなるかな。底なしの沼の上に、破戒者がための庵を築かん。汝に、獅子の齒と馬の顎との栄光を』

手始めに、まだ若い女の信徒が、見えない腕にでも横殴りにされたかのように吹き飛ばされる。

『我は光を憎む者。ヨハンの名におき宣言す、話が御名は、あらゆる言葉を拒絶せん』

背後から放たれた三本の矢は、いずれも彼女に到達する直前でまるで、自ら恐れ戦いたかのように軌道を逸らした。

うち一本は会衆席の椅子の背に、一本は壁にかけられた聖画マリアの額に、そしてもう一本は、不幸にも先程倒された女信徒の左肩へと深々と突き立った。

『遠くにありつつ近くに來たれ、巨人の娘。その息は、黒き子山羊の生き血を吹いて、あらゆる方位に働きかけん』

波紋が、黒の魔女を中心として広がった。

風でも音でもないその衝撃は、信徒たちを巻き込んであらゆるものを吹き飛ばしていく。いくつもの椅子が紙細工のように乱れ飛び、近くにいた信徒達は折り重なって吹き飛ばされる。壁のステンドグラスが、連鎖的に音を立てて破碎した。

『サハリエル、ペネムエ、サタナイル。闇に輝き、光に侵され、変わらぬ生と死を繰り返す、隠者の言葉を代弁せよ。彼の者の嘆きの億が一つでも、訴え知らして叶わぬことを』

最後に、息も絶え絶えに立ち上がり、背後から殴りかかろうとした一人の信徒が、鋼鉄の棒を振り上げた格好のままで動けなくなっ

た。その表情が、恐怖に目を見開いたまま泡を吹く。

——インチキだ。

イーヴは、心からそう感じていた。

エミリは、ただまっすぐに歩を進めているだけだ。

それなのに、ただ言葉を放つだけで、彼があれほど手こずっていた信徒達が、まるで子供の遊びにでも付き合っているかのように翻弄されている。

彼女が会衆席を抜ける頃には、そこに立つ者は魔女とイーヴ、そして彼に抑えられた神父だけとなっていた。

「迂闊ね。黒の帳に手を出しておきながら、予定使徒の準備を怠っていたなんて。わたしが、彼のことを放っておくと思ってた？　こんな男一人のために、危険を冒して教会にまで足を踏み込むことはない？」

教会が最も禁忌する魔女の一人——黒の帳は、視線により一層の敵意を込めて言い放った。

「冗談じゃないわ。イーヴは、私の大切な研究素材よ」

魔女の右手が翳される。

その仕草の意味するところにぞっとした彼だったが、エミリの口が呪文を紡ぐことはなく、彼女はその手で、直接、司祭の胸倉を掴み上げた。

そして、無造作に脇へと突き飛ばす。イーヴはあわてて突きつけていた燭台しよくだいを引っ込めた。その動作があと一呼吸でも遅れていれば、司祭の咽元は真一文字に避けていたことだろう。

「……ふう」

そこでイーヴは、初めて安堵の溜息をついた。その手から、わずかに血の滲んだ燭台が滑り落ちる。

「悪いな。助かったよ…エミ、」

感謝の言葉はそこで途切れた。彼女の視線が、そうさせた。

その瞳が醸し出す瘴気の如き敵意は、まるで減っていなかった。いや、むしろ増している。お前こそが全ての元凶だと言わんばかり

に、魔女の名に相応しい重圧的な視線が、イーヴの全身を貫き通す。魔女が一步、詰め寄る。

その気迫に、イーヴは少なからずたじろいだ。

「——なんのつもり？」

睨み付ける視線の激しさとは対照的に、その声色は冷やかだ。

だがそれは、ナイフの刃が孕む冷たさ。彼女の言葉が紡ぎ出す、敵意の刃そのものだった。

「言ったはずよ。一度魔女と認知された者は、もうその中でしか生きられない。教会は、魔女にとっては処刑場でしかないということも。……それなのに、貴方はここで何をやっているの？」

それは、あまりに一方的な物言いと言えた。こちらの意図や事情はまるで考えず、ただ自分の理屈だけを押し通す、そんな正義。

「おい、ちょっと待——」

イーヴが言い返そうとした、そのとき。

その危機をいち早く感じ取ったのは、またしても白い使い魔だった。

突然エミリの肩の上で羽根を広げ、クア、クアツ、と断続的な鳴き声を上げ始めた。その意味が分かったのは、主たる魔女ただひとりだけだっただろう。

彼女はイーヴの足元に見事なまでの足払いをかけると、自分は虚を両手に抱えながら後方へと飛び退いた。

次の瞬間、イーヴが立っていたその場所に、突如何の前触れもなく炎の塊が出現する。

——いや、そんな生易しいものではない——

それは、小さな太陽だった。

ランプと蝋燭の灯によって僅かに照らされていた室内が、一転して光に包まれる。それは轟々とした光と熱を轟かせた後、出現時と同じようにまるで幻のように掻き消えた。

それとも……今のは、本当にただの幻だったのだろうか？

違う、それは有り得ない。焼け焦げた天井と床板、急激に上がっ

た室温、なによりもむせ返る煙の残滓が、一瞬にして消えた圧倒的な脅威の实在を、ありありと物語っていた。

「な…なんだ!？」

似たような超自然現象自体は、今更、驚くはずもないことだった。規模こそ異なれ、これと同様の理不尽な力を、彼はこの二日間で何度も目の当たりにさせられている。

イーヴがそのとき驚愕したのは、まるで血の気を失った黒の帳の表情にである。

「うそ…」

微かに焦げた息と共に、魔女の口から呆然とした言葉が漏れる。

「――貴方こそ、迂闊でしたね。これが、貴方に対する罠である可能性も、同時に考慮しておくべきでした。そして、罠は見える場所になど設置しません」

それは、司祭の声だった。声のした方に顔を向けると、吹き抜けになっている二階部分、聖堂をぐるりと半回転している回廊の上から、あの司祭がこちらを見下ろしていた。彼だけではない。その隣には、いつの間にか消えていた金髪の少女が待っている。

「今日は、先日とは違いますよ。この娘には、貴方もその男も神敵として刷り込んであります」

司祭は、右手に持っていた分厚い聖書を開いた。

そのとき、イーヴは先程この司祭に感じていた違和感に、ようやく気付いた。

右肘は、どうした？

エミリに完膚なきまでに折られ破壊されたはずの関節が、今、彼の目の前で何の問題もなく動いている。

「…さあ、亜典第四卷・マコノムの肅清書、第七章第三節第四句、誘惑の蛇に関する記述です。レミュ、朗読なさい」

その言葉に、それまでは何があっても無関心にあさつての方向を向いていた少女の瞳に光が宿った。

膝を折り、胸の前で手を合わせると、少女は滑らかな動作で祈り

の姿勢を取る。だが、本来は閉じられるはずの両目は、階下のイーヴたちへと向けて、しっかりと焦点を合わされていた。

その動きはまるで、それまでただの人形でしかなかった器に、今始めて『魂』を吹き込んだかのようにだった。

火を入れた竈。もしくは、弾を込めたマスケット銃。

少女の蓄のような口が開き、音を発さぬはずの咽のどが動いた。

『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。』

子供らよ、墮落に惹かれる事なかれ。蛇の言葉に、耳を傾けることなかれ。

見よ。我が加護する光の他に、汝は何を必要としよう。

その光は汝とその隣人に大いなる恵みを、邪悪なる蛇にはその身を焦がす猛毒となりて、夜闇を裂き、煌々と天より降り注ぐだろう』
それは——聖句だ。

聞いたことがない文句ではあったが、それは明らかに神の威光を称え、悪魔を蔑むための一説だった。

だが。これと同じ声、これと同じ抑揚、これと同じ悪寒には覚えがある。

理性が結論を下す前に、今度は自らの意志で横に跳んだ。

あらわ 顕れたものは、光だった。

天蓋に設えられた大きな陽光取りのガラス窓から帯となって差し込んだ陽光が、数瞬前にイーヴがいた場所を照らし出す。

——そう、陽光だ。

その向こうに広がるのは紛れもない夜空だと言うのに、奇跡のように降り注いだのは、紛れもない太陽の光だった。

聖堂が、再び一瞬だけ昼の明るさに包まれる。

異変は、それだけでは終わらなかった。イーヴが手にしていた十字杖のイエス像が、光に飲まれた瞬間に、音も立てずに消滅した。杖は半ばほどで、まるで初めからそう成型されていたかの如く滑らかな断面で終わっている。

覚えがあるはずだ。

これは、エミリの『魔術』そのものではないか。

魔女をこの世から抹消するべくして動いている教会の司祭が、その魔女と同じ魔術を使っている――

「走りなさい、イーヴ！」

エミリが叫んだ。虚が飛ぶ。

イーヴは、どこへ、とは聞かなかった。走り出し、それから聖堂のどこにいてもあの魔術からは逃れられないことを悟る。

躊躇い無く、彼は割れたガラスのはまった窓へと身を投げ出した。宙に血の帯を撒き散らし、石畳に二度跳ね、積んであった木箱に突っ込んで、彼の身体はようやく止まる。

「――エミリ！」

顔を上げ叫んだ時、建物の中から炎の爆ぜる音がした。

それは見る間に大きさを広げ、見る間に教会は炎の中へと包まれていく。

魔女の姿は、どこにもない。

上空で、白い鴉が旋回していた。

・第五典「聖書と凶眼の物語」

「――よかった、生きてたのね」

姿を確認するなり、彼女は何の抑揚も感じさせない声で、そう言った。

エミリの場所を探し当てるのは、さして難しいことではなかった。正確には、彼女を探し出したのはイーヴではない。上空から虚が二人の姿を見つけ出し、彼を案内していったのだ。

ここは、あの教会からはだいぶ離れた、街外れにも程近い広場である。エミリは、誰かの置き忘れらしき木箱に腰を下ろして、俯いていた。さすがに疲れが出たのだろうか、はぐれたはずのイーヴの

姿が現れても、腰を上げようとしなかった。

——いや。それともそんなこと自体、さして興味が無いのかもしれない。

彼は眉間に力を入れると、両目の間に皺を寄せて、ただ彼女だけを凝視する。

それはとりもなおさず、睨む、という行為であった。

「：何？」

かすかに言葉の語尾が上がった：ように聞こえたのは、気のせいだろう。

イーヴは、そのままの態度を崩さずに言った。

「説明してくれ」

「：意味が、よく分からないわ。私が、貴方に何を説明しろと言うの？」

「どうもこうもない。さっきのあれは、いったい何だ」

エミリは、額を手で抑えながら顔を上げた。

顔色は、やはりよくない。

「異端審問官よ。：本物の、ね」

本物の、という単語を強調して彼女は言った。

そう言えばあの夜、彼女は言っていた。あいつらは、異端審問官のようなものであると。

「一般に姿を見せる異端審問官とは、本質的にまるで別物。でも、他に呼び名がないからそう呼んでいるだけの代物よ。普通の審問官も、法律で禁止されている魔術を用いた魔女や錬金術師を執行する。でも、それは教会法の禁止項目にあたる魔女術マレフィキウムの真似事をした人間だけよ。本物の魔術師を、決して彼らは執行しない」

エミリの言葉に、イーヴは不可解そうに眉根を寄せる。

「：それじゃ、話が逆だろう。まるで、わざわざ偽者の魔女だけを選んで魔女裁判にかけているように聞こえるぞ？」

「ええ、まさしくその通りよ」

エミリは、あっさりとその言葉を肯定して話を続けた。

「無意味な遊戯同然の魔術をも規制する理由は単純明快。要するに、魔術を否定するキリスト教の権威を下げるからよ。聖書は、あらゆる奇跡を認めていない：前にも言ったけど、これは真に信心深い教徒に取っては、わたしたちの想像以上に絶対的な真理よ。どのくらいかと言うと、目の前にその証拠が存在したら、迷わず目を潰すくらいに」

げ、と呟いて、イーヴが一步後ずさりする。

「本物の魔術は、彼らは自分達ですら存在を認めたくないのよ。

だから、ないことにする。

：妙だったとは思わない？ 限定的とは言え、自然現象そのものを扱える相手に、あの信徒たちは人間同士の戦争で使うための道具である、メイスや弓矢で対応しようとしていたでしょう。魔術という存在を認められないから、当然の如く、その対応手段も考えることができないというわけよ」

「でも：それだと、あいつらは永遠に魔女を捕まえられないことにならないか？」

「：そうね。対応手段がない、と言うのは言い過ぎかしら。最も普遍的で応用力があり、かつ、何にでも適用できる一般的な手段――すなわち、彼らは数を用いて魔女を襲うわ。こちらだって、一度に対応できる以上の人数にかられたら成す術もない。まあ、わたしでなければ、あの人数なら十分に執行できたでしょうね」

あっさりと断言すると、エミリはようやく立ち上がった。意外にも、その足取りはしっかりしている。

彼女は月に向かって左手を翳した。その上に、それまで頭上を旋回していた虚が止まる。

「――突き詰めた話、そうして彼らは、わたしたちを理解できないでもいい存在：すなわち、悪魔だとかそれと契約を交して魂を売った者だとか、そういった解釈を行っているに過ぎないのよ」

彼女が頭を撫でると、しきりに体を動かしていた虚が途端におとなしくなった。目を細めて使い魔を撫で続ける彼女の姿は、そうし

で見ていると、子を持つ母のようにも見えなくもない。

「だが、それなら――」

彼が口を開きかけたところで、自由な方の右手が、その続きを遮った。

「――貴方の言いたいことは大体分かるわ。ならば何故、彼らまでもが『魔術』を扱うのかということでしょう？」

再び眉間に皺を寄せたが、イーヴは素直に頷いた。

「分かっているなら、初めからそう言ってくれ。結局、あいつらは何者だ？　なぜ、教会の中に魔女がいる？」

「彼らは、魔女じゃないわ。奴らの正式な呼称は、異端審問会補佐機構・亜典使徒搜索部。これは、正典でも外典でも、もちろん偽典でもない、『亜典』と呼ばれる第四の聖典に登場する使徒を探す者達を指す言葉よ。――でも実際には、諸国を旅しての搜索なんかをするんじゃない。亜典とは、現行の聖書の矛盾点を補填するために、神の言葉ではなく現行の人間の手でこれから作られようとしている聖書のことを言うの」

それは、魔女の側からすればあまりにも幼稚な考えだった。

そもそも、手段と目的が逆である。都合が悪いから大本を変えようとは、ある意味で究極の現実主義者である彼らに取っては、愚かとしか言いようがない。

だが、それがまかり通っているのが今の世の中なのだと、その後エミリは付け加えた。

「……もちろん、わたしたち魔女の存在なんかは、その中でも排除すべき最たるもの。彼らは、子供の中から使徒となるべき候補を選出し、聖務を――例えば、魔女の抹殺を――行うことで、使徒として亜典の中に描かれる資格を得るわ。ペテロやパウロと言った、本物の聖人たちと同列の存在としてね。そりゃ、あの司祭も躍起になるわけよね。」

――考えただけで、吐き気がする」

そこまで言うと、彼女の瞳がずっと細まった。

「前置きが長くなったわね。つまりあれは『魔術』ではなく『神の力を借りた奇跡』として認識されているのよ、彼らには。あの司祭の、まるで碎かれた跡のない右腕を見たでしょう？ 癒しは、わたしたちがいわゆる教会魔術と呼んでいるものの中でも得意分野よ。キリストの弟子たちですら、新約を少し紐解けば死者を生き返らせたり石になった人間を元に戻したりしたという記述が幾らでも出てくるわ。さすがにこれは多少誇張された表現だと思うけど、とにかく奴らにとって、あれは悪魔の術ではなく、神の奇跡そのものなのよ」

言い終え、エミリは皮肉気に口元を歪めた。その気持ちは分からないわけでもない。なにせ、彼らは魔術と言う力を持つ者を病的に嫌悪しながらも、一方では徹底的にその意味をごまかした挙句に、同じ力を利用していることになるのだから。

これほどの矛盾は、他にあるまい。

「気に食わないな。いったい、どこまで身勝手な理屈だ」

「…ところが、そうとも言い切れないのよ」

彼女は、大きな溜め息を吐きながら呟いた。

「この程度の矛盾や屁理屈、どこにでも溢れているわ。王宮や学問、商法、いえ、わたしが気付いてないだけで、ひょっとしたら悪魔学や魔女の社会の中にだってあるのかもしれない。そこに人間が介在する組織なら、そんなのはごくごく当然のこと」

その言葉に、イーヴは驚きを禁じえなかった。これまで教会や神を徹底的に罵っていた彼女の口から出た言葉は、あまりにも弁護めいている。彼の驚きとて、当然のものと言えるだろう。

「一方の理屈を押し通すには、もう一方の理屈を破壊しなくてはならないわ。どちらもが紛れもない正義であるにもかかわらず、逆の立場から見れば同時に悪でもある。わたしだって、聖書と神を価値基準の根幹においた教会の倫理は前提からして理解できない。また、理解する必要もない。不条理は、どこにだって存在する」

だから、と付け加えて、黒の魔女はひどく歪んだ笑みを見せつけ

た。

「こちらも、理不尽に奴らを殺せる正義があるのよ」

「――」

果たして、それは理屈としてまかり通っているのだろうか。

イーヴには、こうも冷淡に人の死を考えたことはない。これまで、その必要がなかったからだ。しかし、彼女は違う。教会の言う善が彼女にとっての悪であるならば、ともすれば彼女の言っていることは至極当然なのかも知れないとは思えた。だが。

だが、イーヴにとって、そんなものはどうでもいい事だった。

「：お前が今まで何人死なせてきたとしても、どうせ俺には関係ない」

「――そう？ やりすぎて教皇に目を付けられた魔女もいるから、参考くらいにはなると思うけど」

「ただ、これだけは聞いておく」

エミリの軽口をまるで相手にせず、イーヴは冷たい声で言い放った。

「他の奴等は、まだいい。――だが、まさかとは思うが、あの子供にまで手をかけるようなことはしていないだろうな？」

そこには、明らかに嫌悪を超える負の感情が込められていた。

彼とて、これまで自分の腕一本で身を守ってきた旅人である。並の覚悟の夜盗なら即座にすくみあがるであろう強烈な眼光が、今は華奢な少女ただ一人へと注がれていた。

「――…………――それを聞いて、どうする気？」

それすらにも関心がないのだろうか、エミリは横の地面へと視線を泳がせる。

イーヴは、それまで背後に隠していたものを取り出した。

「返事によつては、お前を殺すことにした」

背中から回した彼の手には、教会の中で手に入れたあの十字架が握られていた。

ただ、初めに取り付けられていたイエス像は予定使徒の魔術によ

って消失され、代わりにその先端は槍のような鋭さを見せている。どのような力であったのか、その断面はまるで硝子のように滑らかだ。

これなら、適切な力と角度さえあれば、間違いなく人間の体を貫通させることもできるだろう。

「お前が、どうやってあの教会から脱出したかは知らない。そのために何をしたかも、聞きたいと思わない。

だが、いくらあの司祭——予定使徒とやらが世話をしている子供とは言え、お前が、あんな子供ですらも無闇に手にかかるような奴であれば」

イーヴは、刃物と化したその先端を、まっすぐに魔女の咽元へと突きつけて宣告した。

「——俺に取っても、お前は魔女だ」
虚が、エミリの腕から飛び去った。

ひょっとしたら、彼が視線に込めた強烈な感情——『殺気』とも言えるそれを、敏感に感じ取ったのかもしれない。

仮にそうなのだとしたら、彼にも勝ち目はあるだろうか。

万に、一つ程度の勝ち目なら。

「本気？ いえ——正気なのかしら？」

エミリは、視線をこちらに合わせた。ただ、それだけの動作。

だが、それだけの動作にもかかわらず、イーヴの全身は圧倒的な重圧に包まれた。

彼女と、対峙する度に浴びる恐慌。武器を突きつけているのにはこちらであるにもかかわらず、もうどうにもならないという絶望感に、心がくじけそうになる。

「……呆れた。死にかけて——いえ、生きている方がおかしいっていうこの状況に、貴方はそんなことを考えるのね」

口から紡がれる魔女の声は、それでもあくまで十代の少女のものだった。その違和感が、魅惑的な恐怖を更なるものへと煽り立てている。

魔女は、首を振った。まるで、聞き分けの悪い子供を言い聞かせる母親のように。

「それに、貴方は致命的な勘違いをしている。わたしの力じゃ、あの子供だけは殺せない。予定使徒は、司祭じゃないわ。貴方の言った、子供の方よ」

「…なんだと？」

意外すぎるエミリの言葉に、思わず彼は自分の得物を取り落としそうになった。

「そのままの意味よ。考えても見なさい、魔術を指示したのは司祭でも、呪文を唱えたのは全てあの子供だったでしょう。それなら、あの光や炎はその子の内在世界から具現化された存在ということになるわ」

呪文とは魔術を行使するために必要となる意思を抽象化した文章表現によってひとまとめにした言葉だからね、と彼女はその後付け加える。

「…予定使徒は大陸全土でも十人に満たないけど、それらは全て成人前の子供よ。魔術とは精神に対する専有とその強さ——言い換えれば？ こうしたい？ という願いの純粹さと大きさと決まるものなの。…それでは、魔術の天才を量産するための最も効率的な方法——なんだと思う？」

嘲る様に鳴らされた鼻の音が、やけにはっきりと耳に残る。

魔女は、続けた。

「まだ現実世界を知覚する前の子供を買い、四六時中ひとつの価値観を刷り込むこと。他のことは、ほとんど何も考えられなくなるくらい。その代わりに、度でも口を開けば、その子は言葉ひとつに自分の全人生を込められる」

エミリは、大げさに両腕を振りながら言い放った。

「見たでしょう？ あの奇跡を。まるで、神か悪魔の業。初めて目にしたとき、私もそう思ったわ。虚空から炎や光を生み出すなんて…あそこまでいくと、魔？ 術？ ではなく魔？ 法？ と言った方が、む

しろ相応しいくらいでしょうね。

まさしく、彼らに取ってその口は主を称える為だけにあり、その目は主だけを捉え、その膝は主の前にひざまずくためだけにある——というわけよ。言うなれば、あれは神の人形ね」

一方、イーヴは黙ったままその話を聞いていた。

そして、唐突にくるりと背を向ける。

「…え？　ちよっと、どこに行く気？」

エミリは、肩透かしを食らった気分でその背中に声をかけた。

イーヴの歩み出した足が止まる。

だが、そのまま振り向きはせず、彼は答えた。

「話の流れでわからないのか？　俺は、あの子を助けに行く」

「——は？」

それは、本当に何も理解していない声だった。でなければ、イーヴは永遠に彼女の前から立ち去っていたことだろう。

しかし実際には彼は再び振り返ると、魔女の顔を真正面から見据え返した。

「…要するに、あの子は洗脳されてるっていうわけだ。魔術云々はどうでもいいが、俺はそういうことをする奴も、大嫌いだね」

「何を、考えているの？　あの子供は、わたしたちに取っては死を告げに来る死神以外の何者でもないのよ。予定使徒には、干渉しないのが一番いい。手を出すのなら、殺しなさい。予定使徒ひとりに最大で何人の魔女が狩られたか——」

イーヴは、視線だけで魔女の言葉を遮った。

これ以上は、自分の感情を抑えきれない自信がない。おそらく、それは彼が生まれてからこれまで持った中では最大の感情だっただろう。

「…黙れ。お前は、あの子と同じだろう。それなのに、よくもそこまで言えたもんだな」

極大に膨れ上がった怒りを込めて、彼は告げた。

「やはり魔女だ。お前は」

吐き捨てるように言って、踵を返す。もちろん、行く場所は先程焼け出されたばかりの教会跡だ。

魔女の長い話の中で、有意義だったことが一つだけあった。

予定使徒が司祭の指示によって魔術を扱うのなら、司祭とさえ離してしまえば、ただの子供だ。おそらくは魔女の襲撃とその後の火事で混乱しているであろう今なら、うまく立ち回ればあの子だけを連れ去ることもできるかもしれない。

後のことは、そのときにでも、また考えればいい。

「――ま、待ちなさい！」

背中にかけられた二度目の声は、意外なことに――本当に意外なことに、焦燥を帯びているようだった。

この冷酷な魔女のことだから、あっさりと自分を見限るとばかり思っていたのに。

「そんなことが、許されなくても思っているの？ わたしは、二度も奴等から貴方を助けた。だから貴方は、わたしが教会の手から取って来た物――言わば、わたしの所有物よ！」

――ぞくり。

背筋に、何かが迸る。

「：勝手に死んで、いいわけがないでしょう」

魔女から放たれる重圧が、更に何倍にも増幅した。

まるで物理的な圧力すら持っているかのように、関節の上をその気配が纏わり付く。空気はむしろ肌寒いと言うのに、大量の汗が全身をくまなく伝っているのが、まるで手に取るように実感できた。

魔女は、いまや敵意を全身から放っていた。かつかつとイーヴに歩み寄りながら、エミリは左手を指し伸ばす。

その指先は、まっすぐに彼の眉間へと向けられていた。

「――それでも行く気なら、わたしをどうにかしてからになさい。どうせ死ぬなら、わたしが殺してあげるから」

「：わかった」

呟くと、イーヴは両の目を閉ざした。それは、彼女には観念した

顔に見えたのかもしれない。

だが、エミリがその左手を下ろしきるよりも早く、イーヴは目を見開くなり、かつて十字杖だったものを投げつけた。

その先端が彼女に到達するよりも早く、急降下してきた虚が矢よりも数段重いそれを、嘴を使って叩き落す。

エミリは、しばし呆然としていた。だが、その表情が一変すると、下ろしかけた手を再びイーヴに突きつける。

そして――叫んだ。

『終末の魔獣の名に命ず！ 獣の数字の理を、終わりに先駆けて原初へと示せ！』

その言葉を言い終えたとき、彼女の指の示す先にイーヴの姿はすでになかった。彼女の願いによって生み出した空気の渦は、その背後の街路樹に直撃し、梢を大きく揺るがせる。

感情の爆発のままに魔術を放ったエミリが正気に戻ったとき、イーヴはその木に向かって蹴撃の構えを取っているところだった。

「――破ッ！」

蹴る。蹴る。また、蹴る。

全身のバネを限界以上に引き絞って幹を蹴りつける度、火薬の爆発のような音が夜闇に響いた。どうやら、教会で見た棒術のみに限らず、徒手空拳の格闘法もいくらかは身につけているようである。

四度目で幹に亀裂が入り、五度目が止めとなった。さして高くもない街路樹が、エミリに向かって倒れ始める。

それはそれで、確かに驚異的なことではあったのだが。

（：何を、考えているの？）

こんなのは、攻撃でも何でもない。

相手は何度も渾身の一撃を繰り返す労力を払うが、こちらは少し大きく飛び退くだけで回避できる。

真実それはその通りで、エミリはその判断通りに地面を蹴った。足の裏が、地を離れる。

だが、その次の瞬間、彼女はたまたまそこに突き出していた石に

踵を取られ、大きくバランスを崩していた。

「……な？」

転倒。それから、一瞬送れて街路樹が決定的に揺らぐ。

樹は、転倒したエミリから大きく外れた場所に倒れ込んだ。

当たり前と言えば、当たり前の話だ。一本の木を、倒れる方向まで正確に狙って蹴り倒すなどと言う技が、人間の脚力に可能であるわけがない。彼女が後ろに跳んだのだとて、万が一こちらに倒れ込んでくる可能性を考えただけのことである。

あのまま、その場を動かずともよかったのだ。小さな魔術で少し衝撃を与えるだけで、倒れる方向をずらすくらいのは容易にできる。

だが、現実には彼女は飛び退くことを選択し、そして偶然にもそこにあった石によって足を取られた。

もちろん、彼女が起き上がるよりも早く、イーヴはその上に馬乗りとなり、その両手足を押さえつけている。

すかさず跳んできた虚を、イーヴは投石で落とした。本来、鴉は夜目が利かない。小石程度の大きさになると、明かりが少ない夜の広場では、ほとんど見取れなかったのだろう。先程までの見事な動きからは信じられないほどに、白い使い魔はあっけなく地面に落ちた。

「……ぐむむっ！」

暴れて戒めを解こうとするが、所詮無駄なことである。口を抑え、魔術さえ使えさせなければ、黒の帳とてそこらにいる十代の少女と変わりはない。

抵抗はあまりにも弱々しく、そのうち、その微かな抵抗すらもなくなった。

だがそれでも、魔女はその凶悪な視線で睨み続ける。

「少し、俺を甘く見たな。悪いが、俺だって無条件でお前を信用していたわけじゃない。切り札は、あらかじめ抜き取っておいたのさ」

イーヴは、それでも衰えない視線の重圧に押し流されるかのよう

に、説明を続ける。

「正直に打ち明けるとな、俺の凶眼は『物体』じゃなく『現在』の向こうを映すらしい。どうやら無限にある可能性のうち、その時点で確定した未来と自分の行動範囲から分岐し得る結果を、先駆けて知ることができるようだな。応用すればその時点で見えていないものでも見ることができるようから、透視に見せかけることも可能ってわけだ」

「……………」

眼光が、更に一段と陰しくなった。

文字通り、視線が束となって眉間の真ん中へと突き刺されているかのようだ。負の感情を大いに込められた妖艶さが、強すぎる媚薬のように、脳髓を直に刺激している。

冷や汗は、既に彼の全身を濡らしていた。

このままの状態を続けていたら、そのうち気が触れてしまうのではないのだろうか。だが、その焦りを顔に出すわけにはいかない。

そして遂に、彼は言った。

「さて、どうする？ ……このまま、お前をどうにかしちゃってもいいんだぜ」

（……………!!）

無論それは、少女を脅すために口にしただけの言葉にしか過ぎなかったのだが。

唐突に、何かが変わった。変わったのは何なのか？ それを探し、イーヴはすぐにその問い自体が無意味であると気が付いた。

変化が起こったのは、全てだ。エミリの視線、彼女を押さえつける両手足の感触、月明かりの濃さ、空気の濃さ、秋虫の声、草の匂い、目に映る街並み、世界の色。

見た目は変わらない。だが、何もかもが一瞬にして紙一枚の薄っぺらな存在となっていた。

存在を持たない、幻影だけがある世界。

そして気付く。同時に、変わったのは自分自身であるのだと。

「――ふう」

硬直して動けない――いや、動く気にもなれない――イーヴの腕をあっさりとかし、エミリはその下から這い出した。

視線は、そのままイーヴへと向けられている。そこに込められているのは敵意ではない、殺意ですら有り得ない。

当然だ。死者に、生者としての感情は意味がない。

イーヴは、今まさに少女の視線によって殺されていた。心臓は、至って正常に動いている。だが、そのことにさして意味はない。彼はすでに死んでいた、生きているのはただきっかけが与えられていないからに過ぎない――今は、まだ。

――仮に、その状態を例えて表現するのであれば。

彼は、生きながらにして幽霊へとされていたのだ。

「ありがとう。なら、わたしの凶眼のこともきちんとして教えてあげないとね」

エミリは、地面に這いつくばった体勢のまま動くことも出来ないイーヴを見下しながら微笑んだ。

彼は、もはや汗もかいていなかった。身体の生理機能が静止し始めている。当然だろう、死者にかく汗はないのだから。

「死眼。名付けるとしたら、これしかない。ありとあらゆる生命に対し、原因や経過を無視した『死』という現実だけを一方的に与えることのできる死神の目……ふふふ、今、貴方の目に見えているのはレテ川かしら？ それとも、綺麗なお花畑？」

嘲るような口調は、そこで止まった。

「――お前なんか、わたしの手の中で暴れているだけの蛾のくせに……逆らうんじゃない！」

イーヴは悟っていた。彼女と対峙しているときに何度も感じられた年齢にそぐわぬ悪魔的な魅力、あれはやはり恐怖から来るものであったのだと。

研ぎ澄まされたナイフが突きつけられる冷たい興奮。それが、彼女本来の美貌とあいまってあのような妖艶さとなっていたのだ。『

死』という、本能の根幹に関わる部分を抑えられたのでは、その結果にも納得がいく。

抗いようがない。彼女の言葉は、真実だ。

今、彼の身体の中を貫く快感と悪寒は、これまでの比ではなかった。

——これが、黒の帳が敵へと向ける眼光か。

だが、イーヴが死を覚悟——本来はその必要すらもない、彼はすでに死んでいるのだから——した瞬間、あれほどにまで張り詰めていた糸はあつけなく切れた。

全身の筋肉が弛緩し、埃だらけの地面の上へと倒れ込む。この季節にも関わらず、全身が火のように火照っているのが感じられた。

黒の帳は、冷酷に宣言する。

「お前なんか知らない。お前なんか、もう知らない。勝手にどこへでも行つて、勝手に死ぬがいいわ。さあ、消えなさい！」

——殺される。

イーヴはその思いだけで四肢の力を取り戻し、よたよたと立ち上がった。

彼は、一度だけ振り返った。

その背中が消えた後も、黒の帳はその名にふさわしい眼光のまま、夜の街中に、ただ立ち尽くし続けていた。

・第六典「エミリィイルランジュの手記」

これは…怒りだ。苦勞して手に入れた、せっかくの研究素材を失ったことへの。

エミリは、イーヴが去った方向からいつまでも目を離そうとしなかった。

睨み、続ける。それで自分の憤りをどうにかできるのだと、堅く

信じてでもいるかのように。

：勝手な奴だった。

人の気も知らず、最後まで言いたいことだけを言った挙句に去っていった。自分の立場もわきまえずに、ただ直感だけを信じて行動していた。身の程を知らず黒の帳へと挑戦し、予定使徒を教会の手から助けるなどと言ったのけた。

『：黙れ。あの子は、お前と同じだろう。それなのに、よくもそこまで言えたもんだな』

実のところ、彼に言われて初めてその事実気付いたのだ。

教会が、どこから予定使徒となる子供を手に入れているのか。おそらくは凶眼の素養を持った子供の相談を受けた司教あたりが、神の子と称して教皇に売り込んでいるのだろう。それは、つい先日自分が口にした話と、寸分ほども変わらない。

考えてみれば、少し思考を巡らせればすぐにでも分かるような話である。それこそ、魔女の社会についてはつい先日知ったばかりのイーヴが気付くほどに単純な話だ。

だが、エミリは数年の間に渡ってそのことに気付かなかった。似たような話を、他の魔女から聞いたこともない。

違うと思っていたのだ。教会の使いであり、魔女の脅威である以上、彼らと自分が同じ存在などでは有り得ないと。

自分があちら側にいた可能性など、あったはずがないのだと。

『やはり魔女だ。お前は』

気に食わない。どうしたって、気に食わない。

不条理な戸惑いは、同じような不条理さでそのことを気付かせたイーヴへと向けられていた。

だが、このいらつきはそれだけのせいではない。

その理由までは分からなかったが、とにかくイーヴという青年の存在が、常に彼女の心を掻き乱していたのは確かだった。それは、あの人ごみの中から彼を見ていたときから感じていた感情だ。

今思えば、自分は何故、彼を連れて来たりしたのだろうか？

彼が、裁判と称する拷問にかけられようが、それとも火炙りにかけられようが、あるとき何の繋がりもなかった自分には関係なかったはずなのに。

それとも、彼の凶眼は、自分の心を殺してまで研究する価値があるような、大したものにも思えたのだろうか？

その応えは否だ。イーヴルカミユの存在は、魔女エミリイルランジュの存続に、決して正の影響を及ぼしはしない。

だがそれならば、彼が消えていなくなった今、何故、わたしの心は清々としないのだ？

眉間に一層の力を込めた後、エミリは唐突に肩を落した。

：なんだか、むなしくなってきた。

代わりに、彼女は右腕を顔の高さに上げた。とうに気絶から覚めていた虚が、ひよっこりと起き上がるなりその腕の上に飛び乗った。そこから、肩へと飛び移る。

よくよく見れば、広場はまだ祭の余韻を残していた。

収穫祭は昨日で終わったはずであるが、撤収しきれない屋台や捨てられたビラが、まだ幾らか残っている。彼女が母に手を引かれて故郷の祭に参加していたのは、果たしてどのくらい昔のことになるのだろうか？ いや、それを言うならば、今の彼女の年齢とて、同世代の女友達と——もしかしたら恋人と——手を繋いで遊びに来ている姿の方が、むしろ自然なのかもしれない。

だがそれは、彼女にとってとはひどく現実感のない空想だった。

虚が、心配そうに低く鳴いて首を傾げた。まさか、いくら訓練されているとは言え、鴉に彼女の内心が分かったはずもあるまい。だが、エミリは寂しげな微笑を浮かべて、物言わぬ鴉へと応じた。

「…まるで、あの時の再現ね」

エミリは、白鴉に語りかけるように呟いた。

虚は、彼女が少女ではなく魔女として歩んできた道のりの上で、いつも隣にいたエミリ唯一のパートナーだった。

もともとは母が村人に隠れて飼っていたものだが、おそらくは母

も自分と同じく魔女だったのだろう。

虚は、八歳の誕生日プレゼントとして彼女が世話をするようになったときには既に今と同じだけの知能を持っていたし、他にも母が集会と呼ばれる魔女同士の会合に行っていたと思える節も、いくらかあった。また、彼女が遊びやおまじないと称して母から教えられたものの中には、精神を研ぎ澄ませるための魔術訓練として有効なものも、数多く含まれていた。

おそらく、母は我が子の凶眼に気付いていたのだと思う。それとなく、自分に力を統べる方法を教えたかったに違いない。

確かに、その成果はあったのかもしれない。現実には彼女はあの日、娘に真意を告げることなく殺された母の前で、その仇を討つことが出来たのだから。

あのときの感触を、彼女は一生涯忘れることは出来ないだろう。

生きている人間の心臓を直接素手で掴んでいるような不思議な高揚と優越感、そして悦楽。

どくん、どくと波打つそれは、まるで硝子製の太陽だった。

指の一握りであっけなく砕け散る、頼りない宇宙。

そのときのエミリは、手の中の心臓を心の赴くままに握り潰した。引き裂いた。壊した。捻り切った。

やるだけやったその後で、彼女はむなしくなったのだ。

——命とは、こうも脆いものだったのだろうか。

——こうも、あっけないものだったのか。

——こうも、無価値なものだったのかと。

一晚にして何もかもを失った彼女にとって、その軽さは救いだっ
た。母の書斎で、彼女のお気に入りでもあった銀製の鍔はさみを持ち出し、
自分の首筋へと当てた。それが、最も簡単で、かつ意味のある解決
法だった。

いや、簡単な解決法だったはずなのだ。

切っ先が首の皮にめり込んだところで、一筋の汗が頬を伝わる感
触があった。

しばらくそのまましていると、風が吹くような荒い音が、どこからともなく聞こえてきた。よく観察すると、それは自分の呼吸だった。全身が、突きつけた喉元を中心に異様に熱くなってきた。喉が、カラカラに渴いていた。心臓がばくばくとなる音が、嫌にうるさく感じられた。

しばらくすると手が震え出し、鋏がカチカチと揺れ始めた。今にも喉を突き破ってしまいそうで、思わず鋏を放り出した。

——怖い。

——自分の命だけは、消してしまうのがこんなにも恐ろしい。こんなにも儚いの。こんなにも脆いの。こんなにも小さいのに。こんなにも、苦しいものだとか分かってるのに。

それなのに、わたしは自分の生にだけは固執している——。

その事実、茫然とした。情けなくて、涙が出てきた。

情けなくて、情けなくて、馬鹿らしくて——悲しくて。

気がつく、彼女は大声で笑っていた。

いつまでも、いつまでも、なぜ自分が笑うのかすら分からずに、ただいつまでも笑っていた——

(——……)

あのときにすべきだった行動を、わたしは今でも迷っている。

死ぬべきだったのではないか。あれだけの人を殺し、あれだけの命を踏み躪り、自分の命だけは捨てられなかった自分など、どう考えても許されるわけがないのだから。死神の眼を持つ自分など、誰にも愛されるわけがないのだから。

わたしこそ『虚』だ。この胸の中には、何もない。これも無価値で、これも無意味に、これも見苦しく生きている自分にこそ、相應しい。

——こんなとき、あの男ならどうするのか——

指示もないのに、虚が急に飛び立った。月を背に、白い鴉は屋根の向こうへと消えていく。

気分は、ちっとも晴れなかった。虚に言い聞かせることで、逆に

鬱憤が溜まった気がする。

解消するための行動なら、とっくの昔に分かっていた。決めかねていたのは、そうするための理由である。

そんなものは、どこにもない。初めからあるわけがないのだから、当然だ。

だが、結局彼女は歩き出す。

虚の飛び去った方角、そして、あいつの消えた方向へと。

「――むかついた」

敢えて言うなら、それが彼女の行動理由であつたのかもしれない。

・第七典「贖罪と弾効の物語」

三度目の角を曲がったところで、ようやくイーヴは司祭たちの姿を？視？た。

教会の焼け跡で写本や聖像を掘り出していたのはあちこちに包帯を巻いた信徒たちばかりで、例の司祭とあの子供の姿は、どこにもなかった。例の魔術を使えば火くらい簡単に消せそうなものであるが、建物はほぼ全焼に近い。辛うじて骨組みが残っているに過ぎず、隣家に燃え移った様子がないのは、奇跡に近いことだろう。

幸いにも、黒焦げになって詰まれているのはマリア像や木箱の類ばかりで、死体らしき形はひとつもなかった。もともと、先に別の教会へと安置しただけの話なのかもしれないが。

作業をしている信徒たちに訊ねる訳にもいかず、イーヴは闇雲に街の中を駆け回った。

とは言え、彼には未来予視の凶眼がある。路地を左に曲がった場合の可能性、右に曲がった場合の可能性、この場に立ち尽くした場合の可能性など、選択肢のある度に、自分ができ得る行動全てを？予視？し、更にその予視の中での次の選択までも予視する。これを

繰り返すことで、彼は同時に十くらいの場所にいるようなものだった。

確かに便利な能力ではあるが、イーヴの凶眼には欠点も多い。第一に自分以外の者が未来を確定させていない場合——例えば、どの路地を通して目的地へ行くか——を無意識にでも決めていなければ、それだけで未来を計ることはできなくなる。実際、その可能性は高かった。それに、既にどこかの民家の中にでも入っていれば選択肢が多くなりすぎて、これも探しようがなくなる。

それを考えれば、凶眼を使おうが使うまいが、大した差はなかったのかもしれない。だが、結果としてイーヴは三つ先の角で鉢合わせる司祭と子供——たしか、レミュと呼ばれていた——を捉えていた。

視ている映像は、靄がかかったように不鮮明だ。確定しているとさえ、遠い未来ほどこの傾向は強くなる。周りに、あの信徒が何人取り巻いているかは、実際に行ってみるまで分かりそうにないだろう。

だが、少し様子がおかしかった。予視像の彼らは、足を止めているような気がする。

こんな肌寒い夜の中、それも住んでいた家を焼け出された直後で、のんびり散歩というわけでもあるまい。魔女についての報告も必要だろうし、慌しく走っている方が自然である。

（…ま。関係ないか）

彼らの事情は、どうでもいい。予定使徒とやらが、彼らにとってどれほど大切な存在なのかということも、どうでもいい。

（俺は、俺のやりたいようにやるだけだ）

それが一番後悔のない方法だと、彼はよく知っていた。

凶眼とは、個人の願望が具現された形なのではないのかと、彼は思う。

イーヴの母と妹は、彼のせいで命を落とした。

直接の死因は、ある夜に押し入った夜盗のナイフだ。そいつは異

常性格者で、まだ幼いイーヴを組み伏せながらこう言ったのだ。

『母親か妹、好きな方を選べ。片方だけは生かしてやる』

イーヴが沈黙を貫いていると、夜盗は嬉々として妹を、続けて母を刺し殺した。

今思えば、彼は少年のころ、これを除いて選択の判断に迷ったという記憶がない。もしかしたら最近まで気が付いていなかっただけで、彼は無意識のうちにこの能力を発現させていた可能性もあった。予視で視た路地を、右に曲がる。

果たしてそこに、司祭と予定使徒の二人は立っていた。

道の脇には、信徒らしき五人程の男たちが、呻き声を上げながら倒れている。

そして、司祭たちを挟んで反対側、街の中央を流れるローヌ川に掛けられた跳ね橋の上には、黒き魔女の姿があった。

(…な、なんだ?)

イーヴの思考が、ぐるぐると過去と現在を巡り返した。どうして彼女がここにいる? 何故、使徒と正面から対峙している? 彼女は、俺を見捨てたのではなかったのか?

「——うるさいわね! 理由なら、後でもっともらしいのを幾らでも考えてあげるわ。それより、今はこいつらをどうするかを先に考えなさい!」

彼が口を開こうとするよりも早く、エミリが怒鳴った。それでいてうるさいとは、随分と不条理な物言いだ。気のせいか、先程自分と命のやりとりをしていたときよりも、よほど動揺しているように感じられる。

「お…おう」

結局イーヴにできたことは、辛うじてその返事を返すことだけだった。

深い呼吸をひとつとして、頭の中身を切り替える。

彼は、棒術の構えを取った。膝を軽く曲げ、途中で盗んできた屋台を支えるためのものであろうつかえ棒を、左肩と右膝を結ぶよ

うしてに構える。相手の攻撃が伺えないがための、防御に重点を置いた構えだった。

「…神の家に火を付けた上、まだ我らに害を成そうというのですか、サタンの使いよ。どうやら、貴方には肅清が何よりも優先されそうです。こうなれば街中だろうが、私は容赦しませんよ」

「――あなたの、その勝手な理屈はどうでもいいわ。わたし達の目的は、その子供よ。おとなしく渡しなさい。さもなければ、滅ぼすわ」

耳を疑ったのはイーヴの方だった。その言葉を聞く限り、彼女は自分に協力しに来たらしい。

司祭の顔色が、明らかに悪くなった。確かにエミリの言っていた通り、街中での魔術の行使は、彼らにとって好ましくない事態のようだ。

だが、それも叶わない。魔術なしでは、二人はあつという間に彼を組み伏せ、宣言通りにレミュを連れ去ってしまうだろう。

それは、教義的にも実利的にも、教会にとってはあまりに痛い損失だった。

「仕方が……ありません！ 第六巻・ゼブルの賛美楽譜、第一章第九節第…」

「――言わせるかっ！」

イーヴは、ベルトに括り付けた水飲み用の皮袋から、これもあらかじめ拾っておいた石礫を取り出すと、手の上で聖書を広げた司祭へと向かって投げつけた。

少女が、司祭の指示に反応して魔術を行っていることは明らかだった。おそらくは、敵を認識して自分で判断するだけの知能が閉じ込められているためだろう。

付け入るとすれば、隙はそこにあるはずだった。

「…ひっ！」

思ったとおり、投石に怯んだ司祭は魔術の指示を中断した。

イーヴは、その隙にレミュへと向かって跳躍する。先程まで司祭

が視線を向けていた方向――すなわち黒の帳へと目を向けたまま、少女は微動だにすらしていなかった。

イーヴの大きな左腕が、軽々とその体を抱え上げる。

「…駄目よ、イーヴ！」

エミリの言葉は、一瞬だけ遅かった。司祭が、次の瞬間に叫んだのだ。

「こちらへ来なさい、レミユ！」

その言葉を耳にするなり、されるがままになっていた少女が顔を上げた。

聖句を唱えられないよう口を塞いでいたイーヴの右手が、猛烈な力によって弾き飛ばされる。それが、少女の小さな拳によるものだと気付くまでに、彼は数瞬の時間を要した。

その拳で、予定使徒は、今度は目の前にあったイーヴの腹を殴りつける。

それは、正に子供が駄々を捏ねるようなひどく幼稚な仕草ではあったが、それとは裏腹にまるで丸太で殴りつけられたような衝撃に、イーヴの意識が一瞬飛んだ。少女は、その隙に易々と拘束の中から脱出する。

その腕力は、明らかに子供の――いや、人間のそれではなかった。無論、これも魔術による効力である。具体性は帯びないものの、人間は言葉だけではなく視線でも意志を表現できる。表現できると言うことは、魔術の媒体とすることもできるということであった。言わば、これが予定使徒の凶眼なのだ。

無論、これと同じことは、エミリにはできない。それは、予定使徒としての一途すぎる意思力と、肉体による衝撃の強化という極めて単純かつ限定された願いによって、初めて有意なだけの効力を発揮したものだ。

レミユは、まるで母親に呼ばれた幼子のように、とたとたとあどけない足取りで司祭のもとまで走り寄った。走れば十分に追いついた速度だったが、それをしたところでおそらくは今の二の舞になる

だけだろう。

イーヴは追わず、再びその場で構えを取った。内臓のダメージは時間を置いて作用するが、とりあえず動くことに問題はなさそうだ。「イーヴ、無事？」

走り寄ってきたエミリが、ケープを脱ぎ捨てながら彼の背後に回りこんだ。

今度は、盾にでもするつもりだろうか。イーヴは、皮肉気に口元を歪める。

「…ふん。まさか、黒の帳に心配される日が来るとはね」

「軽口言う余裕があるのなら、貴方はまだ使えそうね。…でも、今ので終わりに出来なかったのは、正直言ってつらいわよ——もしかしたら、勝機はもうないかもしれない」

不吉なその言葉に、イーヴは反射的に背後のエミリへと視線を向けた。その拍子に、後ろに大きく突き出していた左肘が、剥き出しになったエミリの首筋を軽く撫でる。

その接触は、一瞬だった。

だが、彼の驚愕は果てしなく長く続いた。

魔女の肩は、小刻みに震えていた。秋風のせいではない証拠に、その身体は微かに火照っている。

「とりあえず、死ぬときはせめて司祭を道連れになさい。そうすれば、後はわたしが世話してあげるわ」

…ああ、そうか。

これが、彼女なりの軽口の叩き方なのだろう——

「なによ。ついに、気でも触れたの？」

くつくつと苦笑を漏らし始めたイーヴに、いかにも怪訝そうな声で背後のエミリが訊いてきた。

彼はにやりと笑って、同時に四肢へと力を込める。

「——いや。お前も案外、可愛いところがあるんだと思ってな」

「…なっ!？」

魔女の動揺を合図に、イーヴは真っ直ぐに左へと疾走した。相手

の攻撃の中に広範囲に渡る魔術がある以上、エミリとは離れていた方が得策だ。

彼女が絶望的と言った状況の中で、イーヴの口元は歪んでいた。気を抜けば、笑い出してしまいそうだった。何故だか、楽しくて楽しくてしょうがない。

「いいいいー、ひゃっほううっつー！」

路上の石がひとりでに浮かび上がっては弾丸となり、イーヴを襲う。

だが、彼に命中する礫はひとつもなかった。物陰から物陰へと飛び移り、躲し切れないいくつかは手にした棒を使って防ぐ。

勢いは強烈でも、狙いをつけているのはまだ十歳にもなっていないただの子供だ。軌道があまりにも素直すぎて、今の自分に当たる気はまったくしない。

小石の弾幕の間隙を読み、イーヴは進路を九十度転換して突っ込んだ。

今度の狙いは、予定使徒自身ではなく、その脇に立つ司祭の方だ。少々手荒ではあるが、彼を昏倒させさえすれば、全てが片付く。

「第三卷・シェハキムの弾劾書、第七節第十七章第二句：——詠みなさい！」

少女の視線の照準が、ぴたりと彼に合わせられた。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。」

エノクよ、この場所は楽園の北側。明るい闇と黒き炎に包まれし、ここは囚人の落ちる場所なり。

忘れるなかれ、汝が主に背く限り、その魂は必ずこの場所へと墮つるのであると」

避けられないと知り、彼はその場に足を下ろして、構えた棒を垂直に立てた。

その行為に意味があったとは思えなかった。彼を襲ったのは強烈な冷氣であり、それは空気を歪ませることで僅かに姿を見て取れた。冷氣が消え去った後、彼の肉体は見える場所全てが赤く腫れ上が

り、腕や顔からはいくつもの氷柱が垂れ下がっていた。到底、凍傷で済む程度のものとは思えない。

司祭も、そう思ったことだろう。だが、次にイーヴがしたことは崩れ落ちることではなく、突進を再開することであった。

彼が動揺している間に、イーヴは既に間合いの半分以上を詰めていた。あと三つ数える後には、間違いなく彼の棒が司祭の顔面を襲っている。

「——こうなったら、あまり派手な奇跡は使いたくありませんが：仕方ありません！ レミュ、第七卷アラボトの聖別書、最終巻第七節全句、終末の盟約に関わる記述です！」

（：まずい！）

こちらの一撃が届く前に、おそらく聖句は詠まれてしまう。

かと言って、あの魔術は躲そうと思って躲せるようなものでもない。

もう一度あんな魔術を受けて、果たしてまだ動けるか——いや、それ以前に生きていられるかどうか。

「止まるな！ そのまま、突っ込みなさい！」

再び彼が足を止めかけたとき、その声が響き渡った。

イーヴは、一瞬逡巡する。だが、全身を止めるために踏み込んだその一步は、逆に力強く地を蹴った。

少女が、聖句を唱え出す。

『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。』

全なる主よ、旧約と新約を超えて、我らに理を与えたまえ。天が落ち、地が吹き出ても、我らは汝に従いたし。

我らはここに盟約す。個にして全、無にして無限なる主の威光を、永遠に渡りて賛えんことを』

『禍なるかな、禍なるかな、禍なるかな！』

破滅への予定書を順に辿れ！ 赤き空へと堕ち出でよ、炎の尾を引く不吉の星よ！

虫の木の名と鉛の鎖、水を苦しめ、あらゆる者への楽園と、その

秩序を崩落せしめよ!』

エミリは、すでに火をつけておいた火口箱を投げつけた。

彼女の魔術に干渉し、それは正に不吉の名を持つ星の如く、空中で真っ赤に燃え上がる。凶星は、少女の前で膨れ上がれかけていた白光の塊へと着弾した。

二つの魔術が、同軸の空間上で交錯する。

白光は、開放の瞬間に燃え上がった。突如燃え出した自らの魔術に本能的な危険を察したのか、少女は術を中断して、炎と煙から逃れるべく後ろに下がる。同時に、耳をつんざく金切り音が響き始めた。

司祭と少女、彼からはどちらも手が届く距離だったが、

「イーヴ、その子を!」

頷き、イーヴは少女を抱きしめた。そのまま、自分が上になるようにして身を投げ出す。

どちらの術の効力か、虚空で光が爆発した。

(…まったく、これこそ奇跡よね)

エミリは、爆風で目を回した司祭を彼自身のエトワール(儀式時に両手を覆うための布)で縛り付けながら、予想外の結果に嘆息していた。

魔女たちをして神か悪魔と言わしめた予定使徒を、この男は気合ひとつで捻じ伏せたようなものである。

その使徒も、気を失ってしまえばただの子供と変わらない。それは、彼女がずっと想像していたような、魔女にとっての死神の寝顔ではなかった。長い金髪を飴細工か何かのように地面に広げ、規則正しく胸を上下させるその姿には、小さな愛らしささえ感じさせる。無条件に幸せを感じている、まるでそんな寝顔だった。だが、そのあどけない寝顔も、ひとたび現実に戻ればたちまちの内に凍りついてしまうことを彼女は知っている。現実が辛い者ほど、せめて夢

の中では安寧を感じようとするものなのだ。

：ひよっとしたら、彼女も苦しんでいたのではないだろうか。意識と、無意識との狭間にて。

そこにいたのは、確かに過去のエミリ＝イルランジュなのかもしれないなかった。

「こっちは終わったわ。傷の方は大丈夫なの？」

「――そう見えるか、これが？ 魔術でも奇跡でも何でもいいから、とっとと直してくれ。頼むから」

イーヴは痛々しげに言って、真っ赤に変色した右腕を見せた。

ところどころが空気を込めたように膨れ上がり、それが破けている部分では、中から水のようなものが染み出している。見た目ほどひどい傷でもないだろうが、見ているだけで思わず顔を顰めたくなる。全身が似たようなものだと言うのに、これでよく動けたものだ。

「：悪いけど、それはわたしにはできないわ。わたしの魔術は、敵への害を具現化する目的のものがほとんどだから」

「：なんだよ、この肝心なときに」

本気でふてくされているらしいその物言いに、エミリは軽く微笑みを返した。

「我慢なさい。魔術は決して都合のいい万能の力ではないのよ。帰れば、葉ならいくらでもあるから。それとも――」

言いながら、すやすやと眠り続ける少女の方へと目をやる。

「：この娘なら、そのくらいの傷は一瞬で直せるのでしょうかね。何なら、目が覚めたら頼んでみる？」

それはただの冗談のつもりだったのだが、余程痛みが激しいのか、イーヴは「そうするよ」と頷いた。どこまでが本気なのかは、分からないが。

「……ん……」

少女が身じろぎ、うっすらと瞳を開いた。微笑ましい気持ちで、エミリはうっすらと目を細める。

――次の一瞬が、始まるまでは。

その結果は、防ぎようがなかった運命と言えよう。エミリとて予定使徒についてのすべてを知っていたわけではないし、未来予視のできるイーヴの不注意さを責めるには、あまりにも不確定の要素が多すぎた。

予定使徒は、その行動の大部分を本能的な反射動作に依存する。常に付き添う司祭が指定した聖句を暗唱することで魔術行使のためのイメージが形作られ、同時にあらかじめ長時間を掛けて刷り込まれた敵の姿を見つけ出し、その空想を解き放つのである。

ここまでは、エミリも知っていた。だからこそ、初めの夜はすぐ側に予定使徒がいたにも関わらず、イーヴの前に現れたわけである。だが、その本能は自分自身の力を知覚することもまた、行っていた。聖句が鍵となることは分からないまでも、自分の願いがそのまま結果に繋がることは、意識下の常識として脳の中に定着していた。そして今、自分の前には、敵として教えられた者の顔がある。

敵。自分に、害を与える存在。

エミリが声をあげる間すらなく、イーヴの左腕が宙を飛んだ。

「――！！？」

肩口から溢れ出る夥しい量の血液は、二人を中心として煉瓦の溝に沿って広がり、まるで、花のような紋様を形作った。

生命の力強さを誇る、毒々しいほどに真っ赤な薔薇の花。花は、刻一刻とその花弁を広げていく。彼の命を吸いながら。

千切れ飛んだ彼の左腕は、いやに長い時間宙を飛んだ後で、ローヌ川の中へと落下した。

同時に、少女は地を蹴って二人から離れる。二十フィート程も離れたところで、少女は唸り声を立て始めた。

その姿は、まさに獣だ。

目を覚ます『敵』を間近で見たショックで、防衛本能だけが目覚めてしまったのかもしれない。『

…地獄の五層に住む小魔よ。汝の嘆きを記すがいい』

傷口を凍らせることで出血を止めると、エミリは予定使徒に背を

向けたまま立ち上がった。

その背には、何の気概も感じられない。まるで亡霊か、もしくはただの幻影のように、彼女の姿だけがそこに浮かんでいるようだ。た。

「――エミ、リ……？」

辛うじて止めた意識で、イーヴが呟く。その目は、驚愕に見開かれている。

魔女と呼ばれたその少女は、独白のように呟いた。

・「……ごめんなさい」

それは、何に対する謝罪だったのだろう。

自分の愚かさによる懺悔か、それとも、これからしようとしていることに対する贖罪か。

「……ごめんなさい」

エミリは、謝り続ける。

凶眼の力を知ったとき、自分がとてつもなく怖かった。

あるとき、誰かを憎いと思う。そのときに、自分の願望を実現するための手段があつてしまう。

それは、信用できない自分自身への恐怖感。

「……ごめんなさい」

だから、魔術を勉強した。彼女にとって、凶眼が魔女としての素質の印であることは幸いだった。炎や風であれば、殺すことなく自分の怒りを、憎しみをぶつけられる。誰も殺さずに、身も守れる。

――でも。

「……ごめんなさい」

本当に必要なときは躊躇わずこの力を使えるようにと、ずっと、自分に言い聞かせてきたはずなのに――

「やめろ、エミリ……！」

イーヴの凶眼が未来を見た。彼女は、ゆっくりと首を左右に振る。今、分かった。わたしは、きっと彼に憧れていたのだ。

もっと言うなら、彼のまっすぐな生き方に。ときには、自分の左

腕を切断されても、その相手を許せるくらいに。

それは、わたしには到底できない生き方だから。

「…ごめんなさい。イーヴ、——母さん」

振り向いた黒の帳の両頬は、溢れ出る涙で濡れていた。

「やはり、貴方はあるとき殺しておくべきだった——！」

彼女の世界が、律動する。

凶眼の瞳に移るものは、生きるものと生きてないもの、その二つだけだった。眼前の生命、まだ本格的に燃え盛る前の淡い命へと手を伸ばす。

現実の視点で、少女の顔が哀れなほどに歪むのが見て取れた。

今、エミリが凶眼を使うことに意味などはなかった。指導者を失った使徒は、たとえ本物の獣並の運動能力を持っていようと、黒の帳の障害とは成り得ない。その脚力で跳躍した一瞬に、彼女は数回の魔術を打ち込むことができるだろう。

許せないから。だから、殺す。

彼女の中にあるのは、ただ憎悪のみだった。理性に先駆けて感情だけが暴走し、自分自身が制御できない。

それは、彼女が最も恐れていたこと。同時に、最も成し遂げたかったことでもあった。

やはり、少女は昔のエミリだったのだ。

ならば、彼を傷つけたのも私自身だ。

過去の自分を殺してしまえば、わたしはもう二度と自分を許すことができないだろう——そんなことは、どうでもいい。

本能が先に死を受け入れたレミュが、泡を吹いて崩れ落ちた。

死を統べる魔女は、一層の憎しみを眼光に込める。

お前は、いてはいけなかった。お前がいたから、イーヴが傷ついた。お前がいたから、母は死んだ。お前がいたなければ、何も起こることはなかった。そして、きっとお前は悪くない。

だから。

だから、お前の存在そのものがいけなかったのだ——！

幻想の中で手に掛けた心臓を、視線で握り潰すべく、目を凝らす。その瞬間、偶然にも彼女の視界の端に入ったもの。笛。

なんの変哲もない、木笛だった。

そんなもの、祭の時期ならどこの夜店でも売っている。笛の端には長い紐が通されており、その先は少女の首へと回されていた。音が出るかも怪しい安物だ。倒れた瞬間に、服の胸元から地面に零れ落ちたのだろう。

意識の大半を封じられた少女が、これを欲しがったはずはない。ならば、この笛を買い与えた者は、そのとき何を考えていたのだろうか。

教会の道具でしかないはずのこの少女にも、一人くらいの共感者がいたのだろうか――

一瞬の物思いにより、張り詰めていた意識がぷつりと絶えた。視界が、急速に闇へと塗りつぶされていく。

昏い闇へと落ちながら。

そのときに彼女が感じていたのは、仮初めでも十年振りの安らぎであったのかもしれない。

・終幕 「黒い帳の伝承」

ピィィィィー……

それは、合図の音だった。

雲ひとつない空を悠々と旋回していた彼は、すぐさま頭を下に向けた。

彼の眼下に広がるのは、遠い昔から商業都市として名を馳せてきた古い街並である。同じような煉瓦の屋根が並んでおり、その間隙を縫うように走っている通りには、今日も早足で通り過ぎる人々が

いる。

その一角に、さほど繁盛もしていない店があった。人間でない彼には、それが何の店であるかには興味がない。ただそこが、彼の家であるという事実だけに意味があった。

アルルの中心部にも程近いこの区域は、ほとんど隙間なく家と家とが隣接している。こうして上空から眺めることで初めて分かるような建物同士の隙間へと、彼は急降下する勢いを最後まで殺すことなく、その白い身を滑り込ませた。

空中に放られた豆袋を、その途中で受け止める。

「クアーツ」

「よし、よし」

テーブルの上で豆を突付き始めていると、柔らかい指が彼の頭を撫でてきた。今の自分の主人でもあるこの少女は、数度も撫でると彼の脇に吹いたばかりの木笛を置く。

つい最近まで合図はただの指笛であったのだが、最近の少女はもっぱらこれを使うようになっていた。

…そう言えば、近頃この家は随分と慌しくなっているようだが、そのことと何か関係でもあるのだろうか？

豆を突付く動作を止め、彼は主人の顔を見上げた。

「今日はね、お仕事を頼むわ。この手紙をリヨンの南端にいる魔女のところへ届けて欲しいのよ——って、あれ？」

言って、きよろきよると辺りを見渡す。その後、彼女は店の表へと続く扉を覗き込むなり、かなりの大音量で叫び込んだ。

「ねえ、イーヴ！ さっきまでわたしが書いていた手紙、どこにやったの？」

その瞬間、廊下の奥から瓶や棚やらをひっくり返す音がした。

しばらくして姿を見せた男は、仏頂面に顔を膨らませている。この家を慌しくさせている原因のひとつは、間違いなく最近入ったこの居候のせいだろう。

あの夜に左腕を離して帰ってきた彼は、今は包帯で吊ってこそい

るものの、しっかりと二本の腕を携えていた。まさか新たに生えて来たわけでもないだろうが、果たして、これは一体どういうことなのだろうか。

「——なんでもかんでも俺のせいにするなよ。あと、いきなり大声も出すな。驚くだろうが、こいつが」

無事に動く右腕で、男は彼の服の袖をずっと握り締めている女の子の金髪を軽く叩く。あの夜に彼の主人が連れて来た、三人目の同居人だ。

彼が少女の姿をこの家で目にするのは、これでまだ四度目のことだった。つい先日までは、ずっと男の部屋に入り込んでいたようである。そう言えば前回この少女の姿を見たときには、男の腕も元に戻っていたような気がする。医術の心得でもあるのだろうか、この娘は。

…まあ、どちらにせよ、彼にとってはどうでもいいことではあるが。

少女が、くいくいと男の袖を引っ張った。

「ん、どうした？」

「…あのね。手紙。……そこ」

十歳前後という少女の外見年齢の反し、彼女はまるで幼子のような言葉しか発さない。

彼女の指の先、彼の主人の腰ベルトに、白い紙片が挟まっていた。

「…あ、いつの間に」

「いつの間に、じゃないだろ。大方、自分で差しといて忘れてていただけだろうが」

その文句を皮切りに、二人の間で口論が始まった。はっきり言って、最近はいつもこの繰り返しだ。

本当に、この家は騒々しくなってしまったと思う。彼は、物静かな方が好きなのに。

しばらく待ったが、どうやら長くなりそうだった。溜息代わりに、机の上の豆袋を突付き始める。

「……………」

彼は再び、頭を上げた。先程の少女が、興味しんしんの表情で、自分の食事を覗き込んでいる。

どうやら、彼の餌を横取りするつもりはないようだが…それにしても、食べづらい。

彼が首を傾げると、少女は驚いたように身を引いた。だが、しばらくすると、彼女はおずおずとながらも、彼の主人が持っていたはずの小さな紙片を取り出した。

「手紙。…お願いね」

そう言っ、たどたどしい手つきで、手紙を彼の足に巻きつける。少女が力の加減を間違えて彼の足を折るのではかとはらはらしながらも、彼はじっとその作業の完了を待った。

「…いってらっしゃい」

手紙を結び終え、最後に少女はにっこりと笑顔を浮かべた。

どうやら、ここでの彼の役目はもう終わりらしい。後は、この大空を跨いだ先で、彼と同じ匂いを持つ鳥か獣に渡すだけだ。

「クワァー」

彼は、入ってきたときと同じ勢いで窓枠から飛び出した。

そのまま、どこまでも高く、高く、空へと飛んでいく。

雲の帳を抜けた先には、また別の空が広がっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7230p/>

魔女の帳 - rideau de wicca -

2010年12月25日23時55分発行